ISSN 0563 − 8461
東水試出版物通刊No. 369
調査研究要報No. 206

伊豆大島における採貝漁業について

平成5年3月

東京都水産試験場

目　　次

はじめに …… 1

Ⅰ．調査方法 …… 1

Ⅱ．調査結果 …… 3

1．島しょの漁獲量

1）　海区別漁獲量 …… 3

2）　種類別漁獲量構成 …… 4

3）　海域別漁獲量指数の推移 …… 5

4）　種類別漁獲量指数の推移 …… 6

2．島しょ全体の貝類漁獲量

1）　海区別漁獲量 …… 7

2）　種類別漁獲量 …… 8

3）　海区別漁獲量指数の推移 …… 9

3．島しょの漁獲金額

1）　海区別漁獲金額 …… 10

2）　種類別漁獲金額構成 …… 11

4．島しょ全体の貝類漁獲金額

1）　種類別漁獲金額 …… 12

2）　海区別貝類漁獲金額割合 …… 14

5．大島の採貝漁業の経営体

1）　採貝漁業従事漁労体数 …… 15

2）　採貝漁業年間延べ従事者数 …… 16

3）　年間出漁日数 …… 17

4）　年齢構成 …… 18

5）　漁業形態 …… 19

6）　年齢と漁業形態 …… 20

6．大島の漁獲量
1）　漁協別漁獲量 …… 21
2）　種類別漁獲量 …… 22
3）　漁協別漁獲量指数の推移 …… 23
4）　種類別漁獲量指数の推移 …… 24

7．大島の貝類漁獲量
1）　種類別漁獲量 …… 25
2）　漁協別漁獲量 …… 26
3）　伊豆諸島全体に占める割合 …… 27
4）　種類別漁獲量指数の推移 …… 28

8．大島の漁獲金額
1）　漁協別漁獲金額 …… 29
2）　種類別漁獲金額 …… 30
3）　全漁獲金額に占める種類別漁獲金額構成比 …… 31

9．大島の貝類漁獲金額の推移
1）　種類別漁獲金額 …… 32
2）　漁協別貝類漁獲金額の全漁獲金額に占める割合 …… 33

10．差木地漁協の採貝漁業の実態 …… 34
1）　採貝漁業従事者
(1)　採貝漁業従事者
a．採貝漁業従事者数の推移 …… 36
b．種類別年間従事日数 …… 37
c．漁業者別年間従事日数 …… 38
(2)　種類別年間延べ従事者数 …… 39
(3)　月別延べ従事者数
a．月平均従事者数 …… 40
b．種類別比較 …… 41
(4)　漁場別延べ従事者数
a．年間平均延べ従事者数 …… 42

b．種類別比較 …… 43

2) 採貝漁業漁獲量

(1) 年間漁獲量

a．種類別漁獲量 …… 44

b．種類別構成 …… 46

(2) 月別漁獲量

a．月平均漁獲量 …… 47

b．種類別比較 …… 48

c．種類別構成 …… 49

(3) 漁場別漁獲量

a．年間平均漁獲量 …… 50

b．種類別比較 …… 51

c．種類別構成 …… 52

(4) 漁業者別漁獲量

a．年間漁獲量 …… 53

b．年別推移 …… 55

c．種類別構成 …… 56

d．年間延べ従事日数と漁獲量 …… 57

e．年齢と漁獲量の関係 …… 58

(5) クボガイ類漁獲量について

a．漁獲量構成 …… 59

b．漁場別漁獲量 …… 60

3) ＣＰＵＥ

(1) 貝類全体ＣＰＵＥ

a．年別比較 …… 61

b．月別比較 …… 62

c．漁場別比較 …… 63

(2) 魚種別ＣＰＵＥ

a．年別比較 …… 64

b．月別変化 …… 65

c．漁場別比較 …… 66

4) 漁獲物の出荷・販売
(1) 島外出荷の実態 …… 67
(2) 島外出荷先 …… 68
(3) 東京市場での価格 …… 69

11. 大島の禁漁区漁場の利用状況
1) 年間の口開け日数 …… 70
2) 禁漁区利用漁業者数 …… 71
3) 禁漁区利用者の漁業形態 …… 72
4) 禁漁区での漁獲量
(1) 漁獲量の推移 …… 73
(2) 種類別漁獲量割合 …… 74
(3) 各漁協別の構成比 …… 75

Ⅲ. ま と め …… 76

Ⅳ. 参考資料 …… 83

付 表

調査機関及び協力機関

調 査 機 関

東京都水産試験場　大島分場

とりまとめ

東京都水産試験場大島分場研究員　有馬孝和*

協 力 機 関

東京都大島町差木地漁業協同組合

〃　波浮港漁業協同組合

〃　泉　津漁業協同組合

〃　岡　田漁業協同組合

〃　元　町漁業協同組合

〃　野　増漁業協同組合

＊　現：（財）島しょ振興公社　栽培漁業センター

大島に於ける採貝漁業について

はじめに

東京都の栽培漁業は、平成３年栽培漁業センターの稼働とともに本格的にスタートした。今後は、畑作りとしての漁場造成と栽培漁業を担っていく漁業者自身の意識の普及・啓蒙といった人作りが重要な課題になってくる。さらに、栽培漁業が導入された後は、漁場管理・漁業管理を前提にした資源管理型漁業が展開される必要がある。その場合、対象になる栽培漁業種の漁業・漁獲の実態等の把握が不可欠である。しかし、採貝漁業を主とする磯根漁業の実態については十分な把握はなされていない。

そこで、伊豆諸島の中でも磯根漁業への依存度が強く、採貝漁業が盛んな大島町の差木地漁協を選定し、採貝漁業の操業・漁獲の実態を調査してきた。昭和61年から平成２年までの５年間の調査結果を中心に、大島の採貝漁業についてその実態を取りまとめたので報告する。併せて、過去20年間の漁獲統計資料を整理し、参考資料とした。なお、この調査は昭和61年は組織的研究（水産庁補助事業）、昭和62～63年は都単事業として実施した。

Ｉ．調査方法

差木地漁協の採貝漁業の操業・漁獲状況の実態調査は、水揚げ伝票の整理を中心に行った。また、操業漁場の調査については、漁協・漁業者に協力してもらい、毎日の操業漁場を聞き取り、水揚げ伝票に記入してもらった。このようにして得られた資料をもとに、市販のリレーショナル型データベースソフト“R:BASE　5000”を使用し、水揚げ調査用のデータベースを構築し、資料の解析をした。

データベースには、以下に示す18の入力項目を設けた。

デタベース名：ＩＳＯＮＥ

テーブル名：ＧＹＯＫＡＫＵ

カ　ラ　ム	１．操業日（年月日）	２．漁業者名（コード名）
	３．人数	４．漁場（コード名）
	５．トコブシ	６．ガリ
	７．サザエ　大	８．サザエ　中
	９．サザエ　小	10．サザエ　計
	11．バテイラ	12．クボガイ
	13．クボガイ類　計	14．アワビ
	15．貝類合計	16．イセエビ　手
	17．イセエビ　網	18．イセエビ　計

漁業者については、個人名が判らないようにコード名を使用した。漁場については、図10－１に示したように各漁協の禁漁区を除いた一般漁場を７カ所に分け、聞き取った場所を各漁場コードに変換して入力した。なお、差木地漁協の禁漁区のコードはＥ00、不明漁場（聞き取れなかった漁場）はＸ00として入力した。

水揚げ伝票調査のほかに、既存の漁獲統計資料として関東農政局の海面漁業生産統計、東京都の水産、第８次漁業センサス及び昭和63年実施した漁業者アンケート調査結果を参考とした。また、他の漁協における禁漁区の漁獲実態調査は、水揚げ伝票を基に調べた。

調査結果の中で使用されている採貝漁業とは、サザエ、アワビ、トコブシ、クボガイ類の貝類を素潜り、または機械潜りで漁獲する漁業を指す。磯根漁業とは採貝漁業と、テングサ、トサカノリ等を採る採藻漁業とイセエビ刺し網漁業を営む漁業のことである。また、クボガイ類とは、ヒメクボガイ、ヘソアキクボガイ及びバテイラを含み、クボガイ類他とは、それらに八丈島海域で漁獲しているギンタカハマを加えたものである。なお、漁獲統計調査結果の中で使用している最近５年間とは、特にことわりがない限り昭和61年から平成２年までを指す。

なお、本調査を進めるに当たり操業漁場の報告及び伝票への記入に御協力いただいた差木地漁業協同組合及び潜水漁業者各位に厚く御礼申し上げる。さらに、データの入力作業を手伝っていただいた秋野さち子さん、前田孝江さんに深謝いたします。

Ⅱ．調査結果

1．島しょの漁獲量

1．島しょの漁獲量
1）海区別漁獲量

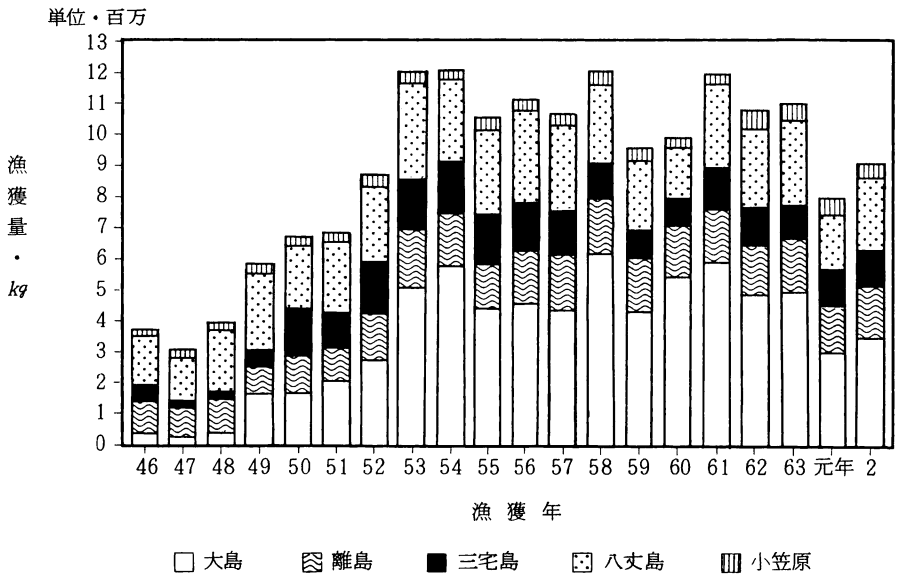


図１－１．島しょの海区別漁獲量

1） 島しょの海区別漁獲量

① 伊豆諸島全体の漁獲量は、昭和54年まで毎年増加してきたが、昭和54年の12,091ｔを最高にその後1万ｔ前後と停滞し、平成元年には7,987ｔで昭和51年以来の低い水準であった。

20年間の平均漁獲量 ： 8,900ｔ

最近５年間の平均漁獲量 ： 10,177ｔ

② 最近５年間の海区別平均漁獲量は、大島本島海区が4,931ｔで全体の43％を占めて最も多いが、昭和61年の5,847ｔをピークに平成２年にはその約６割の3,463ｔに減少してきている。

大島・離島海区 1,697ｔ（17％） 三宅海区 1,187ｔ（12％）

八丈海区 2,406ｔ（24％） 小笠原海区 496ｔ（５％）

③ 海区別の増減を昭和56年以降の10年間についてみると、小笠原海区が1.５倍に増加した以外は停滞または減少し、特に三宅海区では10年前の約７割に落ちてきている。

④ 大島本島海区のサバの漁獲量は、20年間平均で2,583ｔ、最近５年間平均で2,711ｔと、全漁獲量の約72％と約62％を占めているが、昭和54年の5,197ｔを最高に最近減少傾向で、平成２年の漁獲量はその約３割の1,659ｔとなり、全漁獲量に占める割合も48％と減ってきている。

1．島しょの漁獲量

2) 種類別漁獲量構成

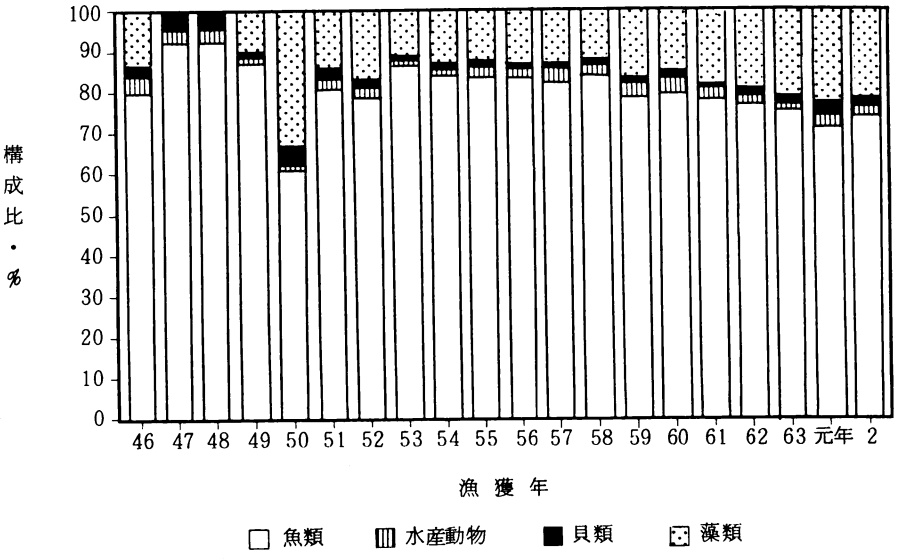


図1－2．島しょの種類別漁獲量構成の推移

2) 島しょの種類別漁獲量

① 種類別漁獲量は、魚類が最も多く20年間平均で、7,112tと全体の80.3%を占め、最近5年間平均でも7,650tで、75%となっている。しかし、魚類漁獲量は量、割合ともに最近減少してきている。

他の種類の最近5年間平均漁獲量と構成比を以下に示した。

貝　類　　205t（2%）　　水産動物　279t（3%）

藻　類　2,043t（20%）

② 昭和61年以降、藻類の漁獲量、割合が増加し、昭和63年には最高の2,268tを漁獲し、全漁獲量の21%を占めた。

- 藻類漁獲量増加の要因は、価格が高騰し、需要も増加しているトサカノリの漁獲量の増加による。
- 藻類漁獲量は昭和63年をピークにその後減少し、最近では2,000tを割っている。

③ 貝類の20年間平均漁獲量は170tで全漁獲量2%にすぎないが、昭和62年以降増加し最近5年間平均漁獲量は205tになっている。しかし、構成比は2%で変わらない。なお、最高漁獲量は昭和50年の323tであった。

- 最近の貝類漁獲量の増加要因は、太平洋沿岸の各県でみられた昭和60～61年群を主体とするサザエの大量発生群が昭和62年頃から漁獲対象となり、大島本島海区での漁獲量が増加したためである。

④ 種類別の増減は、10年以前に比較し、魚類以外が1.2～1.3倍の範囲で増加している。

1．島しょの漁獲量

3) 海区別漁獲量指数の推移

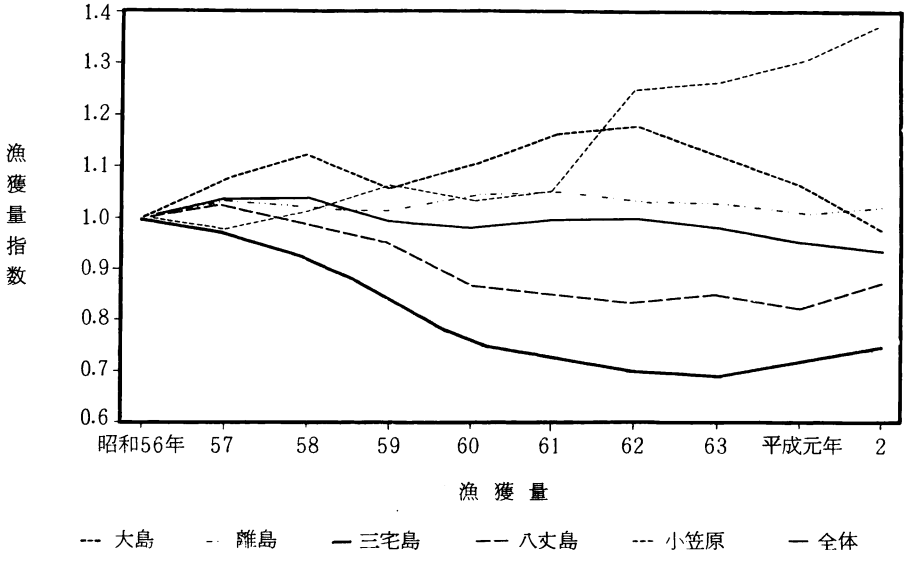


図１－３．島しょにおける海区別漁獲量指数の推移

3) 島しょの海区別漁獲量指数の推移

10年間の島しょにおける各海区別の漁獲量変動をみるために、漁獲量の５年間移動平均を求め、昭和56年の値を基準値として各年の値を割った値をその年の漁獲量指数として図１－３に示した。

① 島しょ全体としては、10％以内の値で大きな変動はない。

② 海区別では、小笠原海区での増加が著しいのに対し、三宅、八丈海区での減少が大きく、特に三宅海区では0.7前後になっている。

- 三宅海区では、昭和62年の0.69を最低に最近持ち直してきており、平成２年では0.74まで回復してきている。

③ 大島・本島海区は、昭和62年をピークに最近減少傾向を示している。

④ 大島・離島海区は、10年間ほとんど同じ水準で推移している。

1．島しょの漁獲量

4) 種類別漁獲量指数の推移

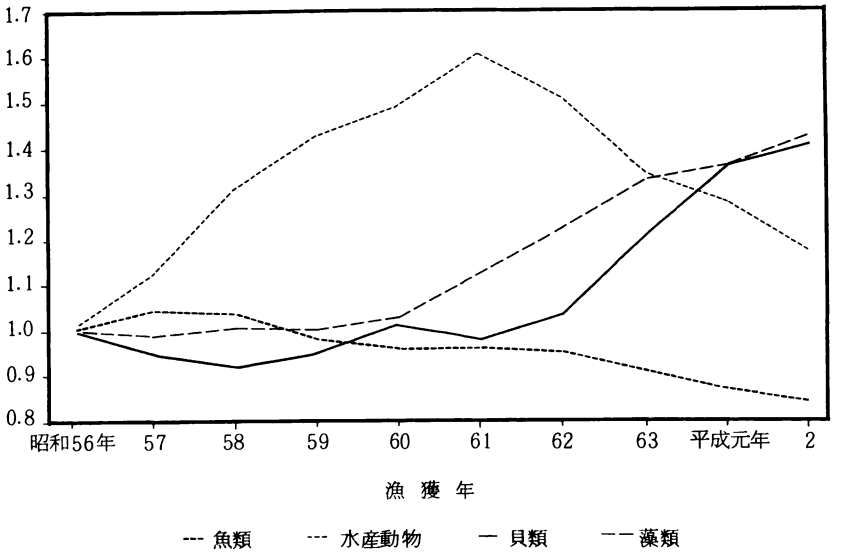


図１－４．島しょの種類別漁獲量指数の推移

4) 島しょ全体の種類別漁獲量指数の推移

10年間の島しょにおける種類別の漁獲量変動をみるために、種類別漁獲量の５年間移動平均を求め、昭和56年の値を基準値として各年の値を割った値をその年の漁獲量指数として図１－４に示した。

① 魚類は昭和59年以降減少傾向を示し、平成２年の漁獲量指数は0.84であった。

② 水産動物は、昭和61年の1.6をピークに最近減少傾向である。

③ 貝類と藻類は毎年増加傾向を示し、平成２年の漁獲量指数はほぼ1.4になっている。

2．島しょの貝類漁獲量

2．島しょの貝類漁獲量
1）海区別漁獲量

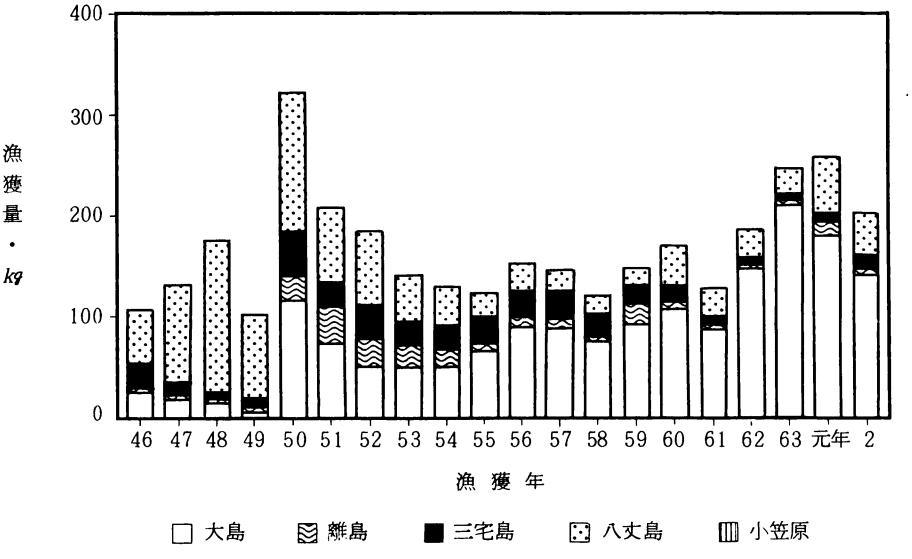


図2－1．島しょの海区別貝類漁獲量

1） 島しょの海区別貝類漁獲量

① 貝類全体の20年間の漁獲量の推移をみると、昭和50年の323tを最高に以後減少し、昭和62年から再び増加傾向を示し、平成元年には259tと過去20年間では昭和50年に次ぐ漁獲量であった。

② 海区別にみると、昭和50年代前半までは八丈海区が最も多かったが、昭和53年以降大島・本島海区が全体の約6割以上を占めるようになった。

- 最近5年間の海区別平均漁獲量と構成割合は以下のとおりであった。

大島・本島海区	153 t（74%）	大島・離島海区	7 t（3%）
三宅海区	9 t（5%）	八丈海区	37 t（18%）

- 大島・本島海区では、昭和63年には過去20年間で最高の208tを漁獲し、島しょ全体の84%を占めたが、平成に入ってからは200tを割り69%台に減少してきている。

③ 海区別の増減を10年前と比較すると、大島・本島海区と八丈海区が1.6～1.7倍に増加しているのに対し、大島・離島、三宅海区では0.5から0.6%に減少している。

2．島しょの貝類漁獲量
2）種類別漁獲量

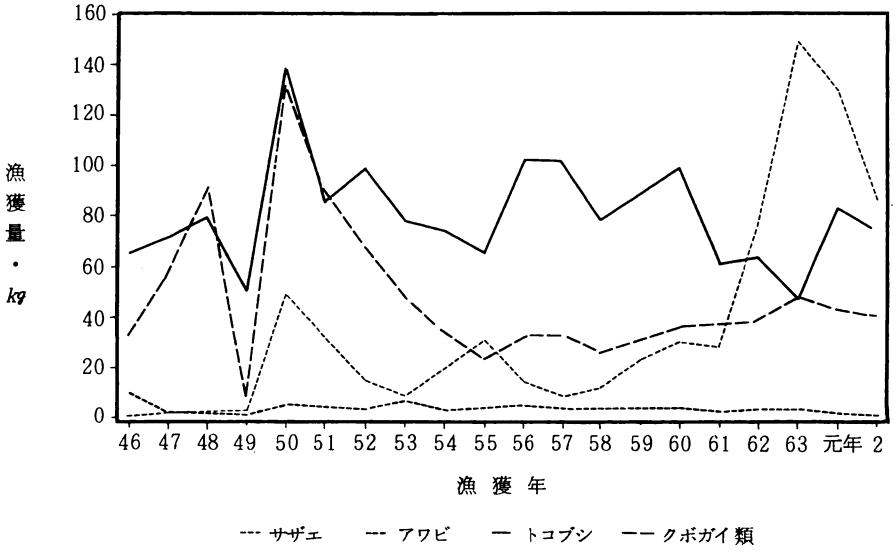


図２－２．島しょの貝類の種類別漁獲量

2）　種類別漁獲量

①　昭和61年まではトコブシの漁獲量が貝類全体の50％以上を占め最も多かったが、昭和62年以降サザエが多くなっている。

・　最近５年間の貝類の種類別平均漁獲量と構成比は以下の通りであった。

サザエ	95ｔ（43％）	アワビ	3ｔ（1％）
トコブシ	66ｔ（34％）	クボガイ類他	42ｔ（21％）

②　サザエは昭和63年の150ｔをピークに平成２年には87ｔになり、最近減少してきている。

③　トコブシは、昭和63年の47ｔを最低に平成元年には83ｔを漁獲し一旦増加したが、平成２年には74ｔで再び減少に転じている。過去20年間の最高漁獲量は昭和50年の138tであった。

④　クボガイ類他は、昭和50年の131tを最高に昭和58年まで毎年減少し、昭和58年の漁獲量はその約２割の26ｔに減った。昭和59年以降再び増加傾向を示したが、昭和63年の48.6ｔをピークに最近では減少傾向である。

⑤　アワビは、昭和46年最高の10ｔを漁獲した後、昭和53年の6.8ｔを最高に以降5ｔ以下で停滞し平成２年には１ｔ台に減少してきている。

2. 島しょの貝類漁獲量
3) 海区別漁獲量指数の推移

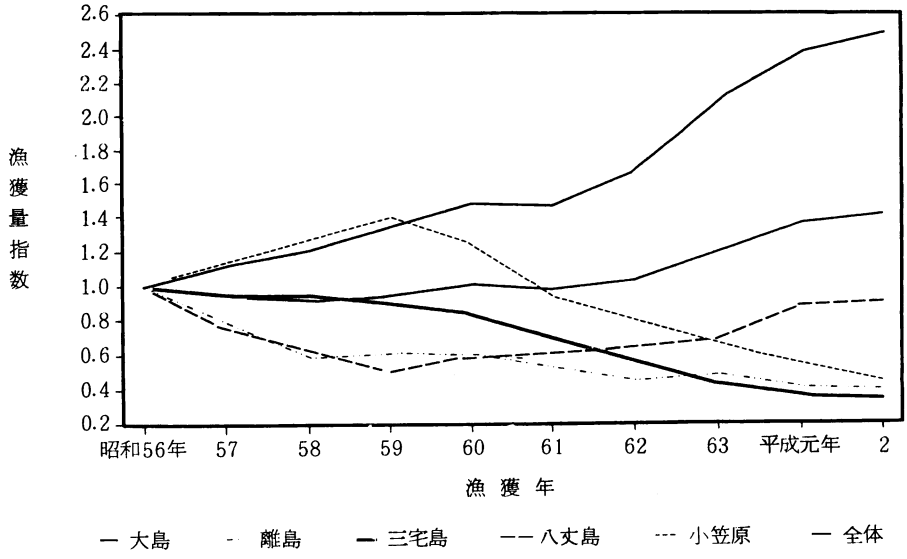


図2－3．島しょの海区別貝類漁獲量指数の推移

3) 海区別漁獲量指数の推移

10年間の島しょに於ける各海区別の貝類漁獲量変動をみるため海区別の貝類漁獲量の5年間移動平均を求め、昭和56年の値を基準値として各年の値を割った値をその年の5年間漁獲量指数として、図2－3に示した。

① 島しょ全体としては、昭和61年まで大きな変動はなかったが、昭和62年以降増加傾向を示している。

② 海区別では、大島・本島海区での増加が著しく平成2年には2.5になったのに対し、他の海区は減少してきている。

③ 八丈海区は、昭和59年には0.51まで低下したが、平成2年には0.90まで回復してきている。

④ 大島・離島、三宅海区は、10年間低下傾向を示し、平成2年にはそれぞれ0.39と0.33であった。

3．島しょの漁獲金額

3．島しょの漁獲金額
1）海区別漁獲金額

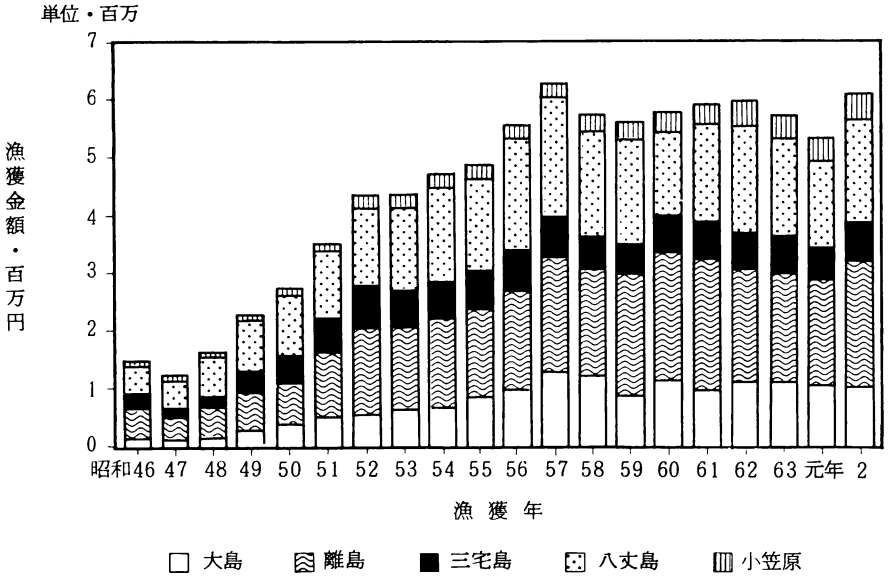


図３－１．島しょの海区別漁獲金額

1）海区別漁獲金額

① 島しょ全体の20年間の漁獲金額の平均は、4,455百万円で、最近５年間では5,802百万円として増加してきている。しかし、20年間の推移をみると昭和57年まで毎年着実に増加してきたが、以後55億円から60億円の間で停滞している。平成2年の漁獲金額は6,108百万円で、過去最高であった昭和57年の6,268百万円に次いで高かった。

② 海区別の最近5年間の平均漁獲金額は、大島・離島海区が2,015百万円で全体の35％を占めて最も多い。

大島・本島海区	1,051百万円（18％）	三宅海区	636百万円（11％）
八丈海区	1,676百万円（29％）	小笠原海区	426百万円（７％）

③ 海区別の増減を10年前の昭和56年を基準にみると、小笠原海区が約２倍に増加している以外は、大島・本島、離島海区が若干増加、三宅、八丈海区が停滞または減少している。

3．島しょの漁獲金額

2) 種類別漁獲金額構成

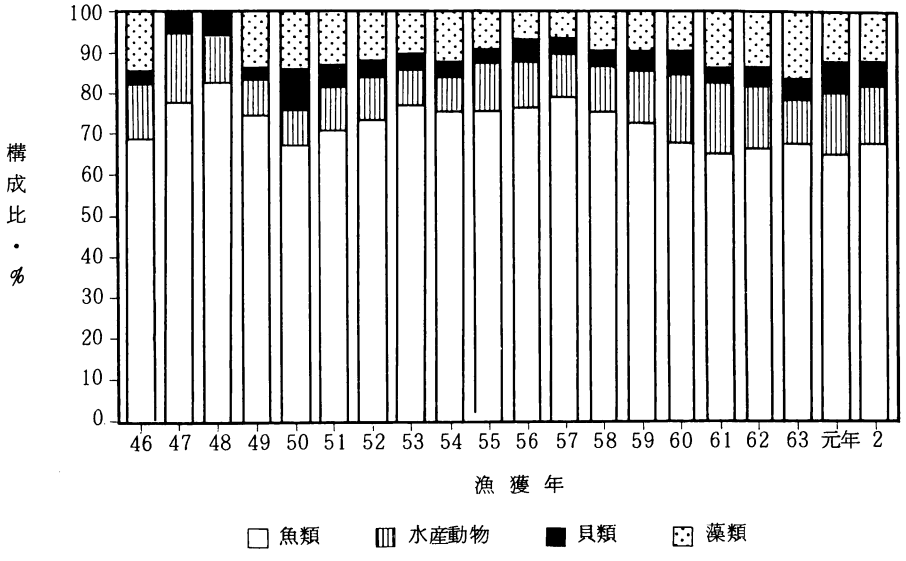


図３－２．島しょの種類別漁獲金額構成の推移

2) 種類別漁獲金額

① 20年間の平均漁獲金額は、魚類が3,191百万円で最も多く全体の72%を占めている。

・ 最近５年間の種類別の平均漁獲金額と構成比は、以下のとおりであった。

魚　類	3,848百万円（66%）	水産動物	836百万円（14%）
藻　類	777百万円（13%）	貝　類	340百万円（６%）

・ 全体としては、魚類の構成比が低下し、藻類、その他の水産動物、貝類の割合が高くなっている。

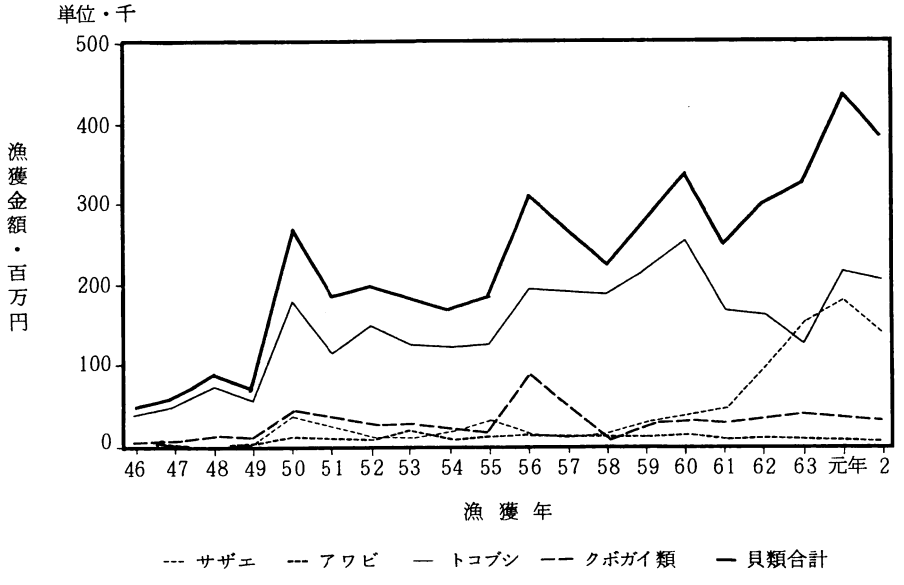
② 藻類は、昭和56年の365百万円を最低に以降毎年増加し、昭和63年には最高の924百万円の漁獲高で、構成比も過去最高の16%になった。平成に入ってからは、７億円前後に落ち、構成比も12%と低下してきている。

③ 貝類は、昭和62年以降3億円以上を漁獲し、平成元年には20年間で最高の438百万円の漁獲高をあげ、構成比は８%を占めた。

④ 平成２年の種類別の漁獲金額を10年前と比較すると、藻類が２倍、水産動物が1.５倍、貝類が1.２倍に増加したのに対し、魚類は約15千万円の減になっている。

4．島しょの貝類漁獲金額

4．島しょの貝類漁獲金額
1）種類別漁獲額



4－1．島しょの貝類の種類別漁獲金額

1） 貝類の種類別漁獲金額

① 貝類全体の漁獲金額は、それまで1億円未満で推移していたのが昭和50年には273百万円となり、さらに昭和62年以降3億円を越え、平成元年には20年間で最高の438百万円を漁獲し、毎年増加傾向を示している。

20年間の平均漁獲金額　230百万円

最近5年間の平均漁獲金額　341百万円

② 最近5年間の種類別平均漁獲金額は、トコブシが176百万円で全体の52％を占め最も多く、ついでサザエの122百万円（35％）となっている。

・ 最近5年間の種類別平均漁獲金額と構成比を以下に示した。

トコブシ	176百万円（52％）	サザエ	122百万円（35％）
アワビ	8百万円（3％）	クボガイ類他	34百万円（10％）

③ トコブシの漁獲金額は、昭和50年にはじめて1億円を越え以後増減を繰り返しながら、昭和60年には、最高の255百万円になった。その後1億円台に減少したが平成に入ってからは再び2億円台で推移している。

・　貝類全体に占める割合は、昭和61年まで6割以上を占めていたが、昭和62年以降サザエの増加により減少し、昭和63年には39％まで落ちた。しかし、平成2年には53％となり5割台まで回復した。

④　サザエは、昭和57年の10百万円から毎年着実に増加し、平成元年には過去20年間で最高の18千万円まで達し、貝類全体の41％を占めた。

⑤　アワビは、昭和50年以降10百万円前後で大きな変動はなく、最高は昭和54年の20百万円である。平成に入ってから漁獲量の減少にともない低く推移し、平成2年の漁獲金額はわずか5百万円であった。

⑥　クボガイ類他は昭和49年に10百万円台になり、昭和57年には最高の89百万円を漁獲した。最近では30百万円から40百万円の範囲で安定した漁獲金額をあげている。

4．島しょの貝類漁獲金額
2) 海区別貝類漁獲金額割合

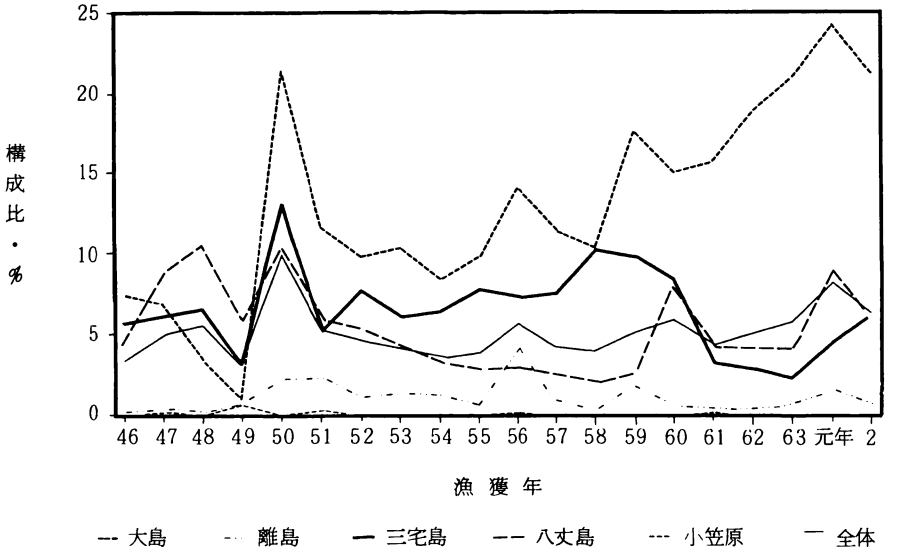


図4－2．島しょの貝類漁獲金額の全体に占める割合

2) 各海区の貝類漁獲金額の全体に占める割合

① 海区別の全漁獲金額に占める貝類漁獲金額の割合を最近5年間についてみると以下のとおりで、大島・本島海区で高くなっている。

大島・本島海区	20%	大島・離島海区	1%
三宅海区	4%	八丈海区	6%

② 20年間の推移を見ると、大島を除く他の海区では、ほぼ10%以下の値で増減し、大きな変動はみられない。大島では、それまで10%以下であったのが昭和50年に21%となり、昭和56年以降毎年10%以上を占め、昭和63年には再び20%台に達し、平成元年には過去最高の24%を占めた。

5．大島の採貝漁業経営体

5．大 島 の 採 貝 漁 業 経 営 体
1） 採 貝 漁 業 従 事 経 営 体 数

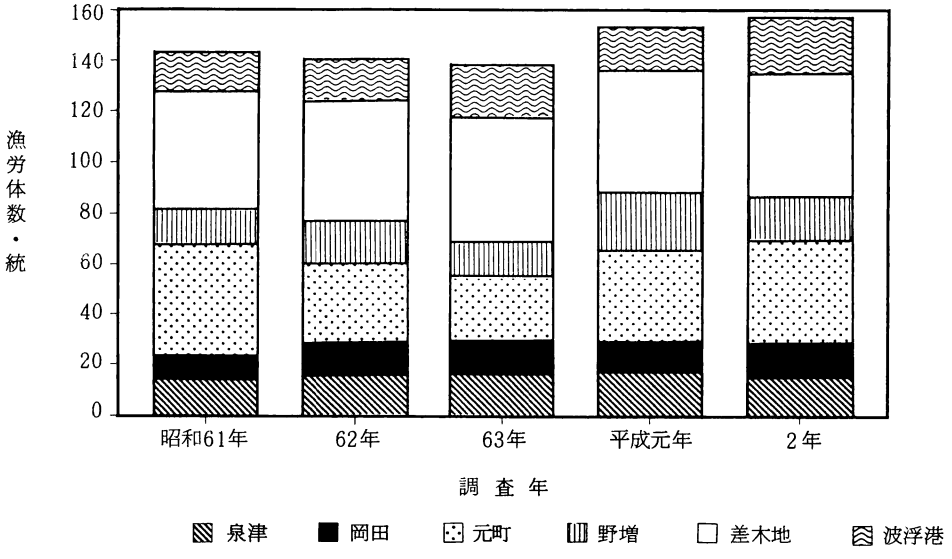


図５－１．漁協別採貝漁業経営体数

1） 採貝漁業従事経営体数

経営体数とは、素潜りまたは潜水機により貝を漁獲する採貝漁業を営んだ漁業者数を示す。

① 大島全体に於ける昭和61年から５年間の平均経営体数は147経営体で、昭和63年の139経営体を最低に最近増加してきている。

② 漁協別の５年間平均経営体数は、差木地漁協が48経営体で全体の33％を占め最も多く、ついで元町の36経営体、波浮港18経営体、野増17経営体、泉津16経営体、岡田12経営体となっている。

平成２年に於ける各組合別の経営体数は以下のとおりであった。

泉　津	15経営体	岡　田	14経営体	元　町	41経営体
野　増	18経営体	差木地	48経営体	波浮港	22経営体

5．大島の採貝漁業経営体
2) 採貝漁業年間延べ従事者数

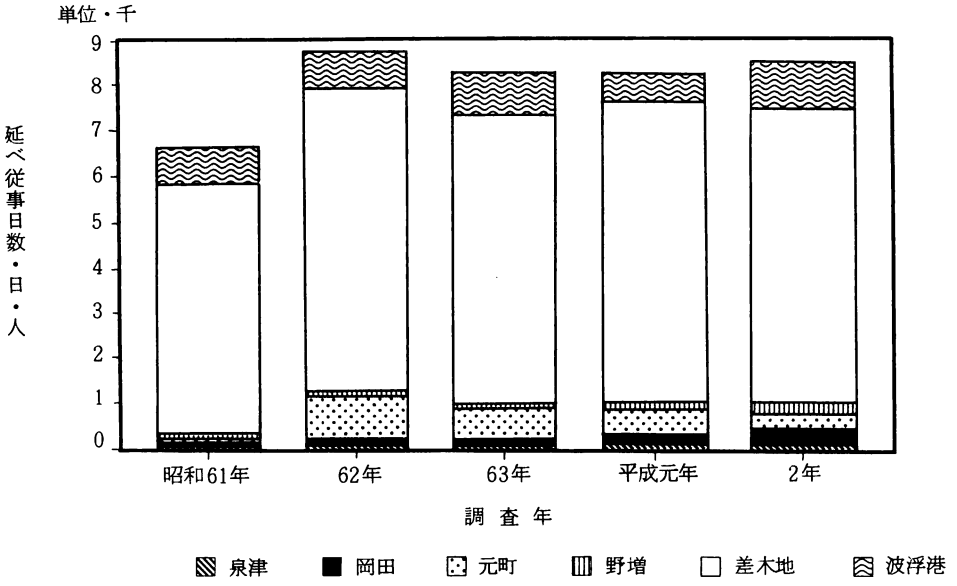


図5－2．年間の採貝漁業延べ従事者数

2) 採貝漁業年間延べ従事者数

採貝漁業年間延べ従事者数とは、採貝漁業に従事した漁業者の年間従事日数の合計を指す。差木地漁協については操業漁獲実態調査から、他の漁協については関東農政局の海面漁業生産統計資料を使用した。

① 大島全体の年間延べ従事者数は5年間平均で8,112日・人で、三原山の噴火のあった昭和61年の6,651日・人を除き、8,000日・人台で推移し、大きな変動はない。

② 漁協別では、差木地漁協が5年間平均で6,342日・人と大島全体の78％を占め最も多くなっている。次いで波浮港漁協832日・人（10％）、元町漁協517日・人（6％）、岡田漁協199日・人（3％）、野増漁協150日・人（2％）、泉津漁協73日・人（1％）となっている。

③ 組合別の年変動を見ると、岡田、野増漁協で昭和63年を境に増加し、逆に元町漁協では平成2年の延べ従事者数は331人で、最も多かった昭和62年の960人の約3分に1に減少してきている。

5．大島の採貝漁業経営体

3) 漁業者1人当たりの年間出漁日数

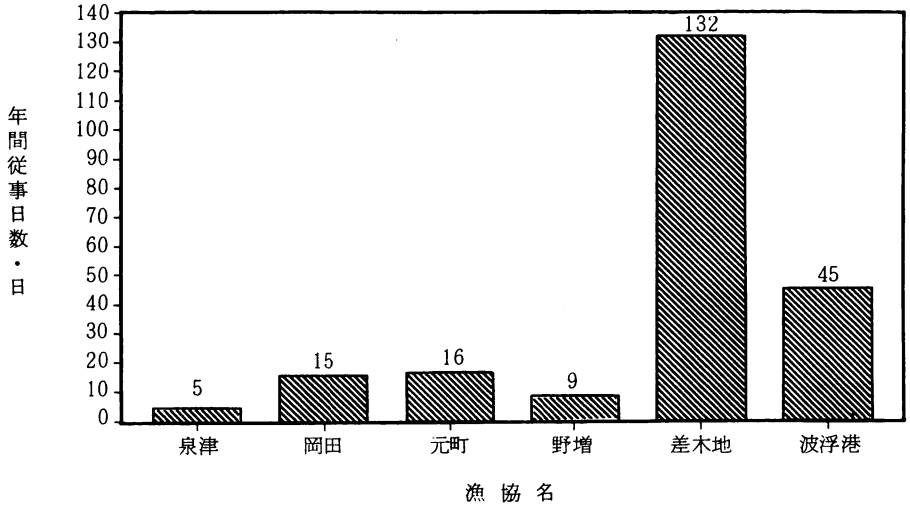


図5－3．漁業者1人当たりの年間平均出漁日数

3) 漁業者1人当たりの年間平均出漁日数

年間延べ従事者数と採貝漁業従事経営体から求めた。

① 大島町全体では5年間の平均出漁日数は55日であるが、組合間のバラツキが大きく差木地漁協では132日で最も多く、他の漁協は全て50日以下と少ない。

② 5年間の推移を組合別にみると、泉津、差木地、波浮港漁協では変化がみられないのに対し、岡田、野増漁協では最近増加傾向を示し、平成2年の従事日数は昭和61年比で岡田漁協が約7倍の27日、野増漁協が2倍の14日になっている。一方、元町漁協では昭和62年の31日を最高に減少し、平成2年ではわずか8日であった。

5．大島の採貝漁業経営体
4) 採貝漁業従事者の年齢構成

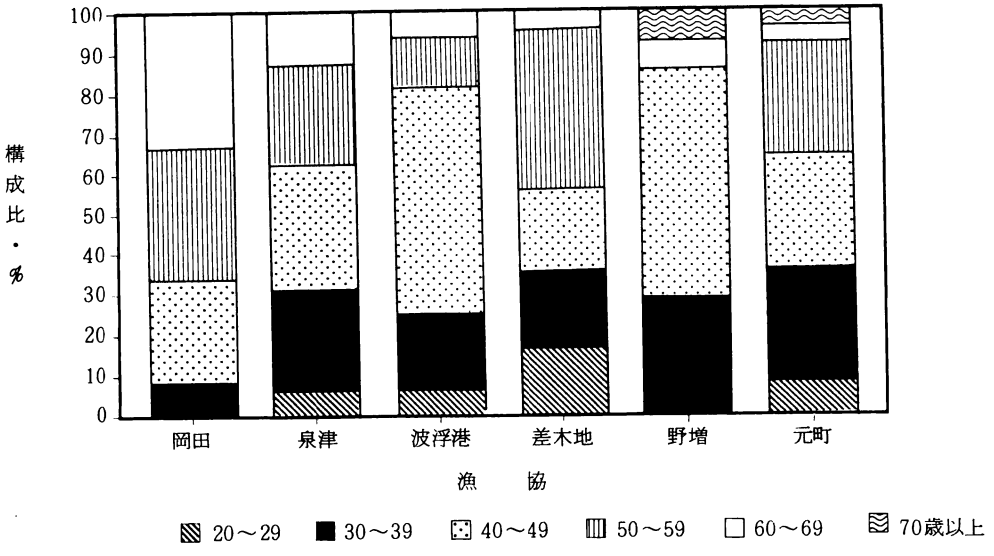


図5－4．採貝漁業従事者の年齢構成

4) 採貝漁業従事者の年齢構成

昭和63年実施したアンケート調査結果をもとに、採貝漁業に従事した漁業者の年齢構成を調べた。

① 大島の昭和63年での採貝漁業従事者の平均年齢は45才で、最高齢71才、最年少21才であった。

- 漁協別平均年齢では、泉津の43才が最も若く、逆に岡田は54才で高齢化が進んでいる。
- 最高令は71才で、調査した128人中70才以上が２名いた。

② 年齢構成は、40才台が41人で全体の33％を占め最も多くなっている。

大島全体の年齢構成を、以下に示した。

20才台	９％（11人）	30才台	21％（27人）
40才台	33％（41人）	50才台	27％（34人）
60才台	９％（11人）	70才以上	２％（２人）

- 組合別では、差木地漁協で20才台の若年層が７人（16％）と多くなっているのに対し、岡田漁協では60才以上が４人で全体の33％を占めた。

5. 大島の採貝漁業経営体
5) 採貝漁業者の漁業形態

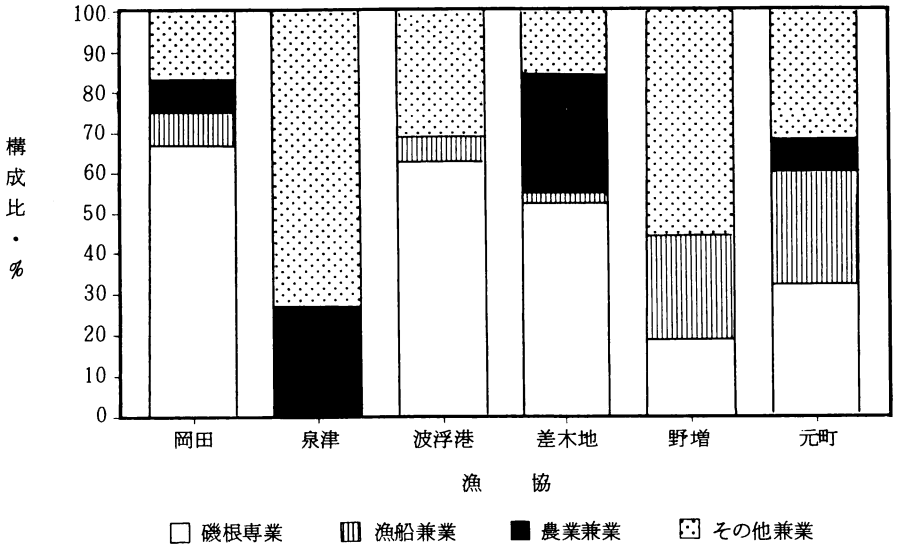


図5－5．採貝漁業従事者の漁業形態

5) 採貝漁業従事者の漁業形態

採貝漁業従事者の漁業形態について、採貝漁業、採藻漁業及びイセエビ刺網漁業を営む漁業を磯根漁業とし、アンケート調査を実施した。

① 調査した 128経営体のうち、磯根漁業を専業にしているのは大島全体で40.6%の52経営体であった。

兼業漁家は、59%の76人で、その内訳は以下のとおりであった。

漁船漁業	14人（18%）	農　業	20人（26%）
そ の 他	42人（55%）		

② 組合別の専・兼業構成比は、岡田、波浮港、差木地漁協で専業者の割合が高く、50%以上を占めている。

- 磯根漁業を専業にしている漁業者の割合は、以下のとおりであった。

泉　津	0%	岡　田	67%	元　町	32%
野　増	19%	差木地	52%	波浮港	63%

- 差木地漁協の兼業者では、農業兼業者の割合が高くなっている。

5．大島の採貝漁業経営体
6）年齢別漁業形態

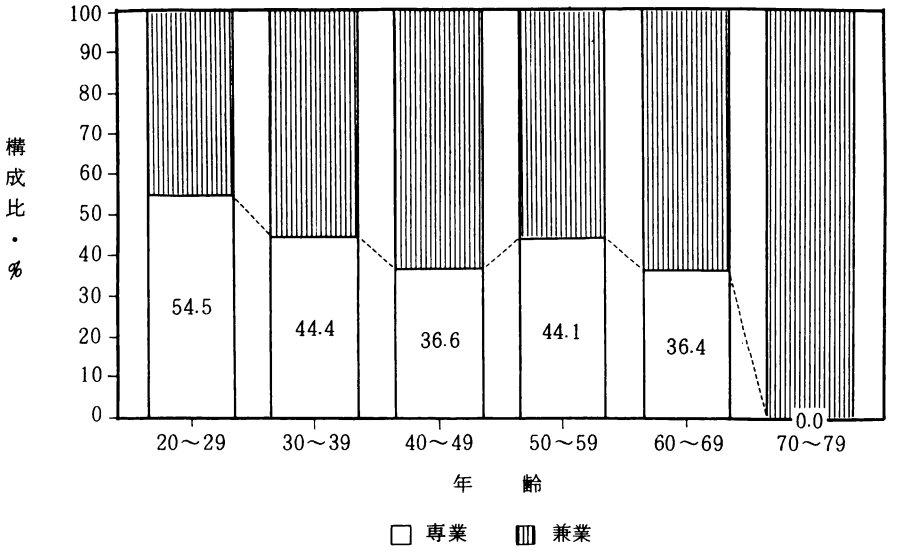


図５－６．採貝漁業従事者の年齢別専・兼業比

6）採貝漁業従事者の年齢別専・兼業比

大島の採貝漁業従事者の年齢別の専・兼業比をみると、20才台では磯根漁業の専業者の割合が55％で最も多くなっており、若年層程専業漁家の割合が高く高齢化するほど兼業化が進む傾向にある。

6．大島の漁獲量

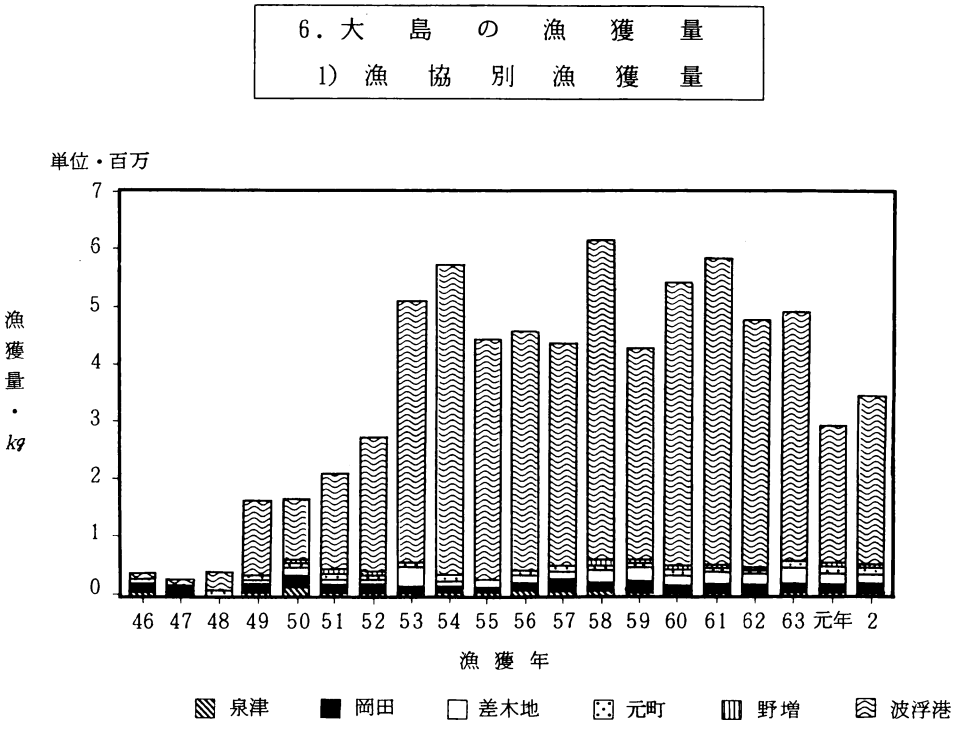


図6－1．大島の漁協別漁獲量

1）　大島の漁協別漁獲量（東京都の水産から）

①　大島全体では、昭和53年以降昭和63年まで5千t前後で増減を繰り返してきたが、平成元年には2,944tで昭和53年以降はじめて3,000tを割った。平成2年には若干増加し3,463tであった。

20年間平均漁獲量　：3,558t

最近5年間平均漁獲量　：4,391t

②　漁協別では、波浮港漁協が20年間平均で3,114t、最近5年間平均でも3,839tと大島全体の79％と87％を占め最も多い。

・　波浮港漁協漁獲量のうち約7割（最近5年間では2,710tで71％）は、サバで占められている。

漁協別の最近5年間平均漁獲量と構成比を、以下に示した。

泉津漁協	28t（1％）	岡田漁協	154t（4％）
元町漁協	92t（2％）	野増漁協	55t（1％）
差木地漁協	223t（5％）	波浮港漁協	3,839t（87％）

6．大　島　の　漁　獲　量
2）種　類　別　漁　獲　量

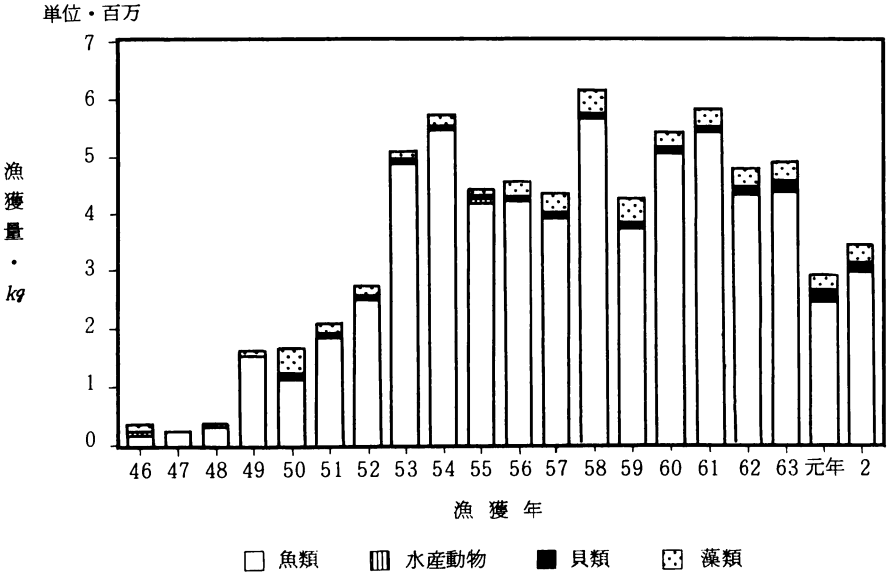


図６－２．大島の種類別漁獲量

2）大島の種類別漁獲量（東京都の水産から）

① 最近５年間の魚類の平均漁獲量は3,899ｔで全漁獲量の88％を占めている。

- 大島に於けるサバの漁獲量は、20年間平均で2,583ｔ、最近５年間平均で2,711ｔでそれぞれ大島全体の魚類漁獲量に占める構成比は80％と70％になっている。
- 魚類漁獲量は、昭和58年5,655tを漁獲し20年間で最高の漁獲量であったが、その後昭和61年の5,411ｔをピークに最近は減少傾向を示し、平成に入ってからは2,000ｔ台に落ちてきている。

② 貝類は、昭和62年以降連続して100t以上を漁獲し、昭和63年には過去20年間で最高の209ｔの漁獲量であった。

- 最近５年間平均漁獲量は153ｔで全漁獲量の3.8％を占めている。
- その他の種類の最近５年間の漁獲量と構成比を以下に示した。

水産動物　22ｔ（0.5％）　　藻　類　317ｔ（7.6％）

6．大　島　の　漁　獲　量
3) 組合別漁獲量指数の推移

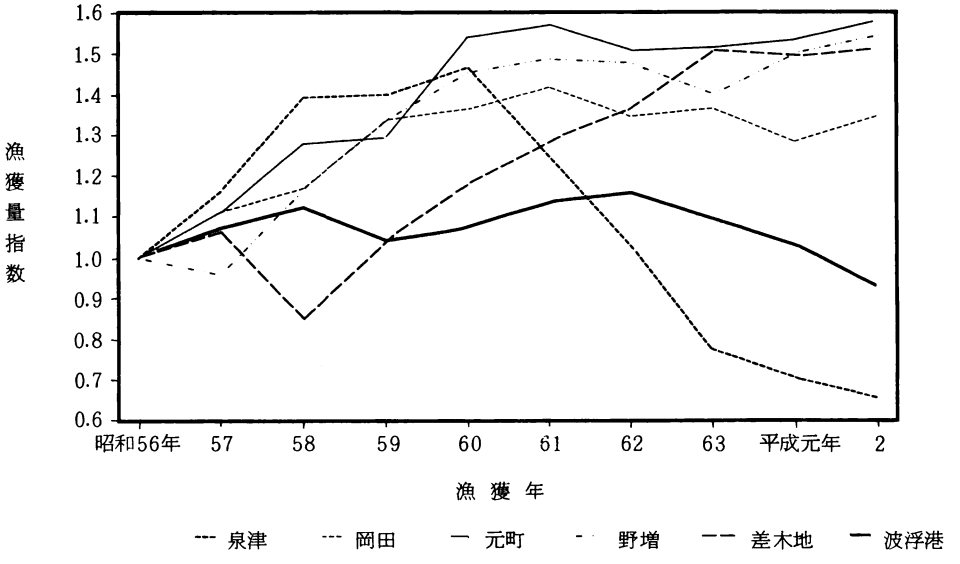


図6－3．大島の組合別漁獲量指数

3) 大島の組合別漁獲量指数の推移（東京都の水産から）

組合別漁獲量の動態を見るために5年間の移動平均を求め、昭和56年の値を基準値として各年の値を割った値をその年の漁獲量指数とし、その10年間の変動を図6－3に示した。

① 岡田、元町、野増漁協は昭和60年まで増加傾向を示したが、その後1.30から1.50の高い水準で停滞している。

② 差木地漁協は、昭和58年の0.85を最低に以降増加傾向を示し、昭和63年の1.51を最高に停滞している。

③ 泉津漁協は、昭和63年以降低下し、平成2年には0.65まで落ちた。また、波浮港漁協は、昭和62年の1.16を最高に低下傾向を示し、平成2年には0.93となっている。

6．大　島　の　漁　獲　量
4）種類別漁獲量指数の推移

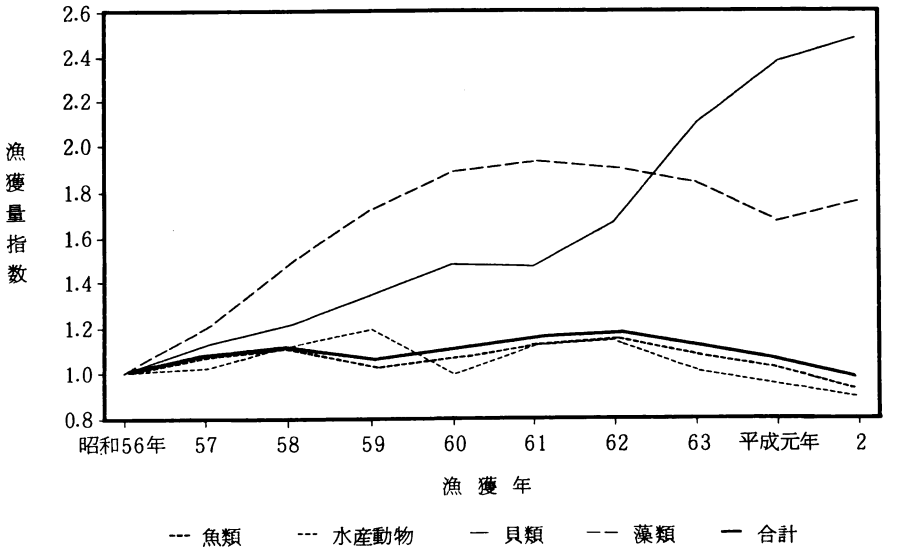


図６－４．大島の種類別漁獲量指数

4）大島に於ける種類別漁獲量指数の推移（東京都の水産から）

種類別漁獲量の動態を見るために５年間の移動平均を求め、昭和56年の値を基準値として各年の値を割った値をその年の漁獲量指数とし、その10年間の変動を図６－３に示した。

① 大島全体としては昭和62年の1.17をピークに減少傾向を示し、平成２年には0.97になった。

② 増加の著しい種類は、貝類と藻類で、貝類は平成２年2.48、藻類は1.75になっている。しかし、藻類は、昭和60年以降1.８前後で停滞しているが、貝類は依然増加傾向を示している。

③ 魚類は、昭和62年の1.14を最高にその後減少し、平成２年には0.92になった。水産動物も同じく昭和62年の1.14を最高に平成２年には0.88まで低下した。

7．大島の貝類漁獲量

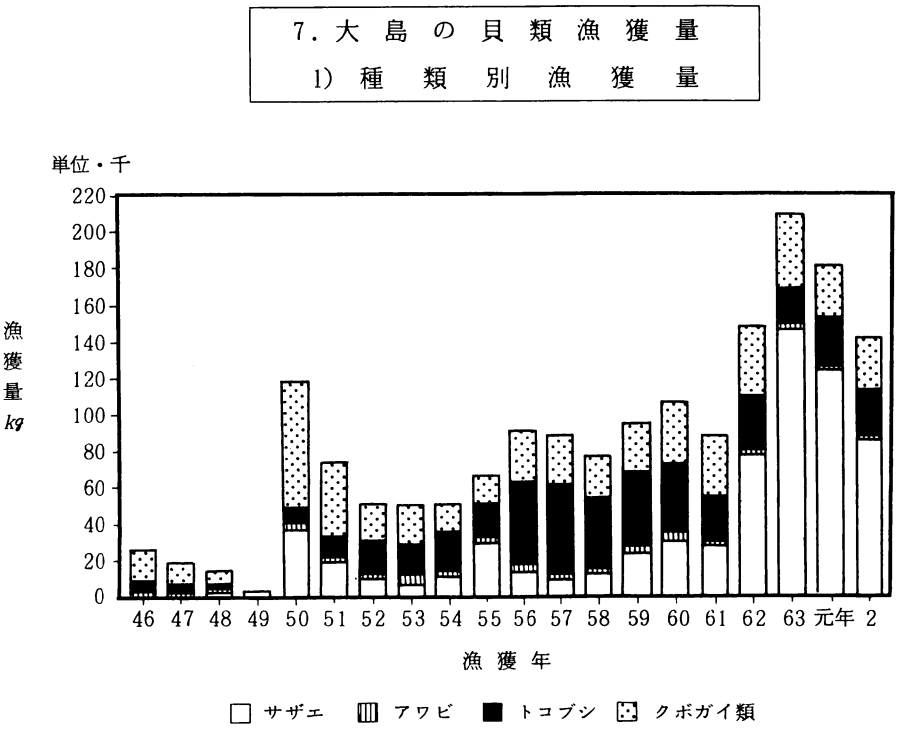


図7－1．大島の貝類の種類別漁獲量

1）大島の貝類の種類別漁獲量（東京都の水産から）

① 貝類全体では、昭和53年の50ｔ以来昭和63年まで増加傾向を示し、昭和63年には過去20年間で最高の209ｔを漁獲したが、その後減少し平成２年には141ｔになった。

② 昭和52年から昭和60年までトコブシの漁獲量が最も多かったが、昭和61年以降サザエがそれに代わり、昭和63年には20年間で最大の146ｔを漁獲した。

③ 20年間の平均漁獲量では、サザエが最も多く33ｔ、ついでクボガイ類の26ｔ、トコブシの22ｔ、アワビの３ｔとなっている。

・ 最近５年間の平均漁獲量を、以下に示した。

サザエ	92ｔ（56％）	アワビ	3ｔ（２％）
トコブシ	25ｔ（18％）	クボガイ類	34ｔ（24％）

・ 各種類別の過去20年間の最大漁獲量は、以下のとおりであった。

サザエ	146ｔ（昭和63年）	アワビ	6ｔ（昭和53年）
トコブシ	49ｔ（昭和57年）	クボガイ類	67ｔ（昭和50年）

7．大島の貝類漁獲量
2）漁協別漁獲量

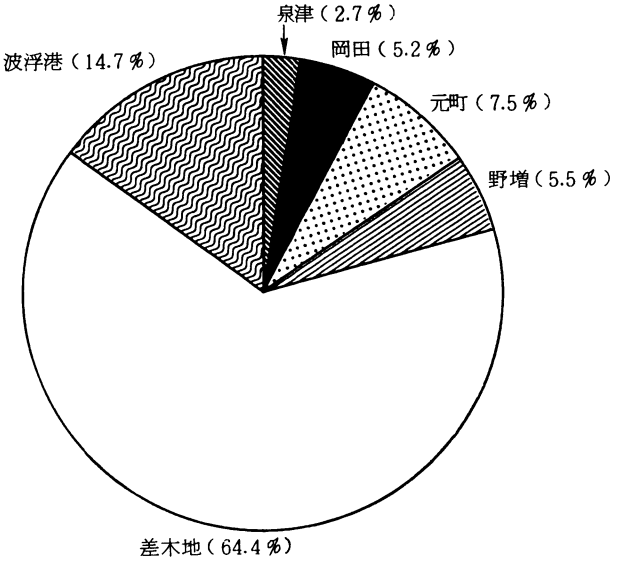


図７－２．大島の漁協別漁獲量割合

2）大島の貝類漁獲量の漁協別漁獲量（東京都の水産から）

① 最近５年間では、差木地漁協が平均漁獲量98ｔで、大島全体の64％を占めて最も多くなっている。

・ 他の漁協の平均漁獲量と構成比を以下に示した。。

泉津漁協	４ｔ（３％）	岡田漁協	８ｔ（５％）
元町漁協	11ｔ（８％）	野増漁協	９ｔ（６％）
波浮港漁協	23ｔ（15％）		

② 差木地漁協では、昭和63年139tを漁獲し、過去20年間で最大であったが、以後減少し平成２年にはその約６割の83ｔに減少してきている。

③ 他の漁協では、岡田漁協が、昭和60年以降平成２年まで増加傾向を示し、平成２年には20年間で最高の16ｔを漁獲し、大島全体の12％を占めた。

7. 大島の貝類漁獲量
3) 島しょ全体に占める割合

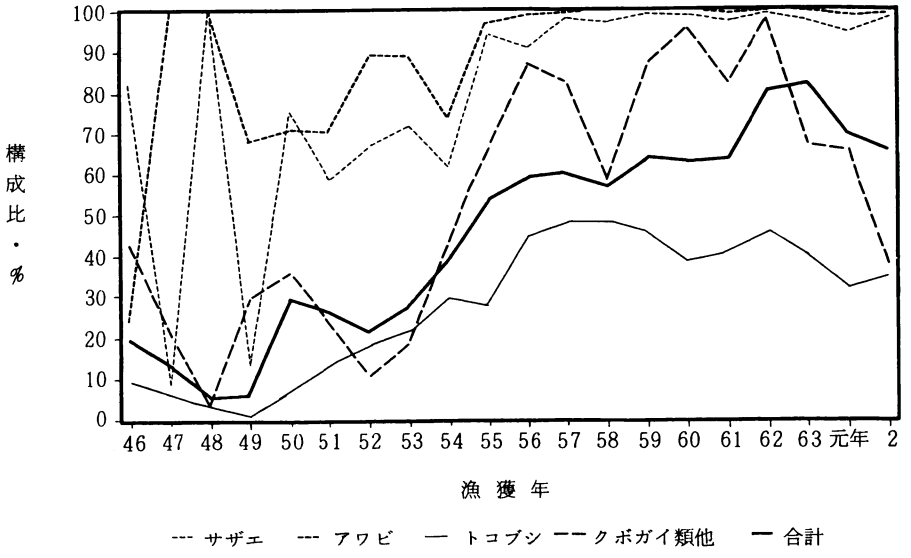


図7－3．大島の貝類漁獲量の島しょ全体に占める割合

3) 大島の貝類漁獲量の島しょ全体に占める割合（東京都の水産から）

① 最近5年間の大島の占める割合をみると、貝類全体では74%、サザエ97%、アワビ99%、トコブシ39%及びクボガイ類82%となっている。

② 貝類全体の20年間の推移を見ると、大島の占める割合は昭和55年以降50%を越え、昭和63年には84%に達した。

③ 種類別にみると大島の全体に占める割合はサザエ、アワビが95%以上の値で変動がなく、トコブシも30～40%の範囲で推移している。クボガイ類は、昭和59年から昭和62年まで80%以上で推移したが、昭和63年には70%を割り、平成2年には38%まで低下した。これは、八丈海区でのギンタカハマの漁獲量（平成2年10.4t）が増加したためである。

7. 大 島 の 貝 類 漁 獲 量
4) 種類別漁獲量指数の推移

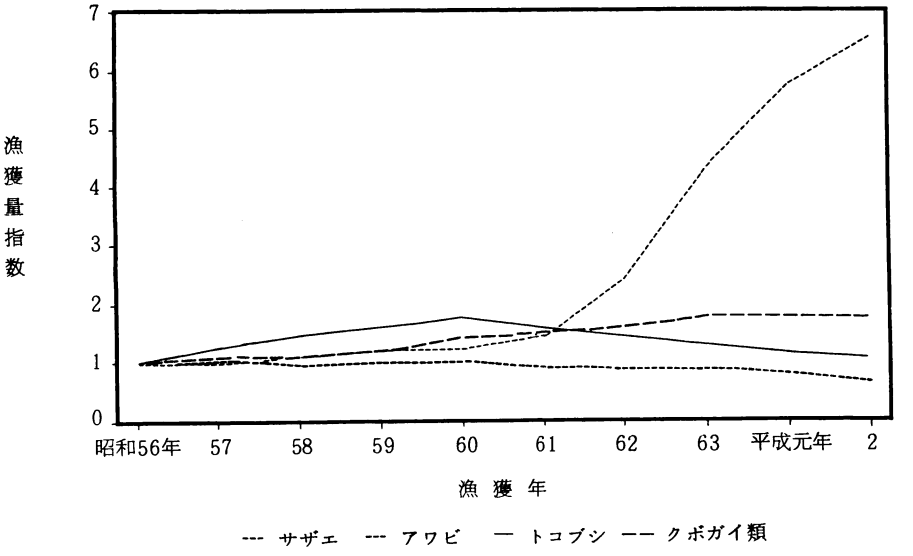


図7－4．貝類漁獲量の種類別漁獲量指数の推移

4) 種類別漁獲量指数の推移（東京都の水産から）

貝類の種類別漁獲量の動態を見るために5年間の移動平均を求め、昭和56年の値を基準値とし各年の値を割りその年の漁獲量指数とし、10年間の変動を図6－3に示した。

① 貝類全体としては、毎年増加傾向を示し、平成2年には2.48になった。

② 種類別にみるとサザエの増加が著しく、昭和61年以降増加し平成2年には6.52になっている。

③ 他の種類では、クボガイ類が増加しているが、昭和63年以降1.7台で停滞している。

④ アワビ、トコブシは最近減少傾向を示しており、アワビは昭和61年以降減少し平成2年には0.66になった。一方、トコブシは昭和60年の1.76を最高にその後減少し、平成2年には昭和56年当時と同じレベルの1.05になっている。

8．大島の漁獲金額

8．大　島　の　漁　獲　金　額
1）漁　協　別　漁　獲　金　額

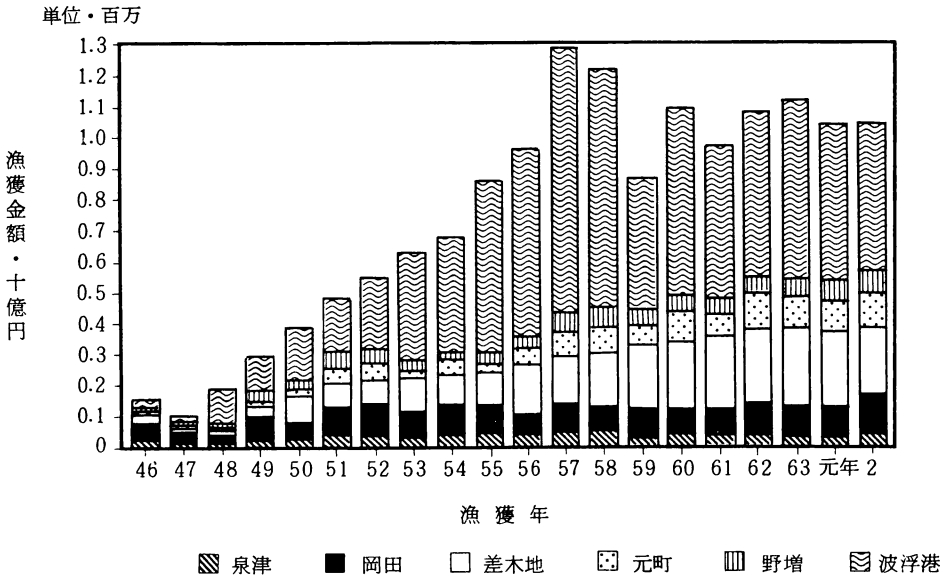


図８－１．大島の漁協別漁獲金額

6）大島の漁協別漁獲金額（東京都の水産から）

① 昭和47年以降10年間毎年増加傾向を示し、昭和57年には過去20年間で最高の 1,288百万円を記録したが、以後漸減傾向にある。

- 過去20年間の平均漁獲金額は750百万円で、最近５年間についてみると1,053百万円と増加してきている。

② 組合別では、波浮港漁協が20年間平均で 396百万円で全体の48％を占めて最も多く、最近５年間平均でも515百万円で49％となっている。

- 波浮漁協の漁獲金額の最高は昭和57年の852百万円(66％）であったが、最近では５億円前後で増減し、平成２年には478百万円に減少した。
- 他の組合の最近５年間の平均漁獲金額と構成比を以下に示した。

泉　津	34百万円（３％）	岡　田	103百万円（10％）
元　町	102百万円（10％）	野　増	61百万円（６％）
差木地	236百万円（23％）		

- 波浮港漁協のサバの漁獲金額は、20年間平均で222百万円、最近５年間平均で233百万円と漁協全漁獲金額の約56％と45％を占めている。

8．大　島　の　漁　獲　金　額
2）種　類　別　漁　獲　金　額

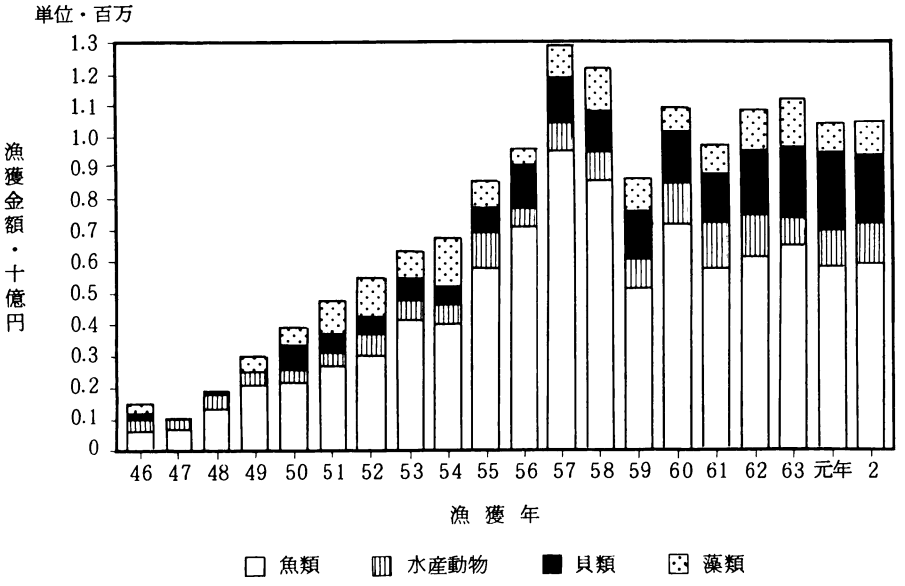


図８－２．大島の種類別漁獲金額

2）　大島の種類別漁獲金額（東京都の水産から）

①　魚類の漁獲金額が、20年間平均で469百万円(61％)、最近５年間平均で603百万円(57％)と、最も多くなっている。しかし、昭和57年の952百万円を最高に、最近では6億円前後で停滞傾向で、平成２年の漁獲金額は592百万円であった。

- 魚類漁獲金額のうちサバは、20年間平均で223百万円、５年間平均で233百万円とそれぞれ魚類全体の約48％と39％を占めている。
- 最近５年間の種類別平均漁獲金額と構成比を以下に示した。

貝　類	213百万円（20％）	水産動物	123百万円（12％）
藻　類	112百万円（11％）		

②　貝類漁獲金額は、昭和56年に１億円台に達し、さらに昭和62年には２億円を超え、平成元年には最高の252百万円を漁獲した。

8．大　島　の　漁　獲　金　額
3）種類別漁獲金額の構成比

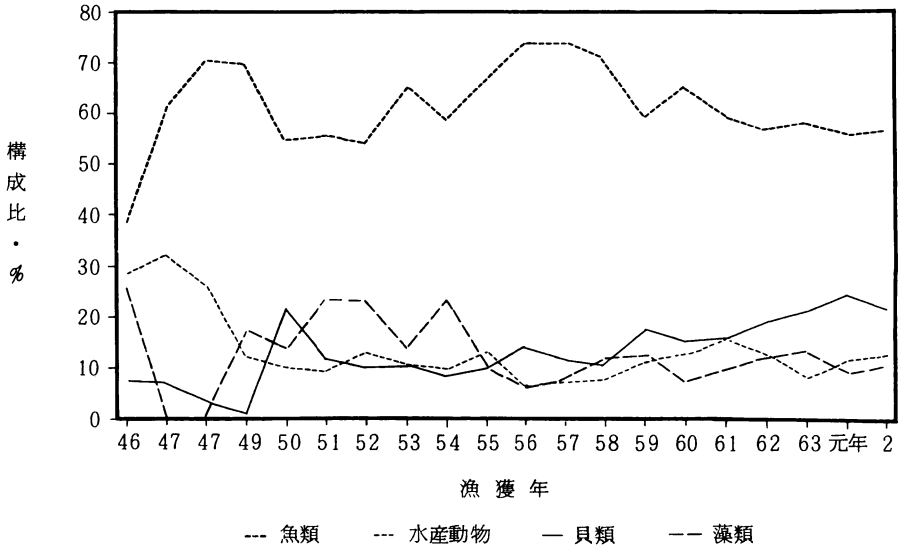


図８－３．大島の種類別漁獲金額の全漁獲金額に占める割合の推移

3）大島の種類別漁獲金額の構成比（東京都の水産から）

① 20年間の平均を見ると、魚類漁獲金額が61％で最も多く、他では水産動物が13％、貝類13％、藻類12％となっている。

・ 最近５年間の種類別漁獲金額の構成比の平均は以下のとおりで、貝類の増加が著しい。

魚　類　57％　　水産動物　12％　　貝　類　20％　　藻　類　11％

② 貝類の漁獲金額構成比は、昭和56年以降10％以上を記録し、昭和63年以降は平成元年の24％を最高に、20％以上を占めている。

9．大島の貝類漁獲金額

9．大 島 の 貝 類 漁 獲 金 額
1） 種 類 別 漁 獲 金 額

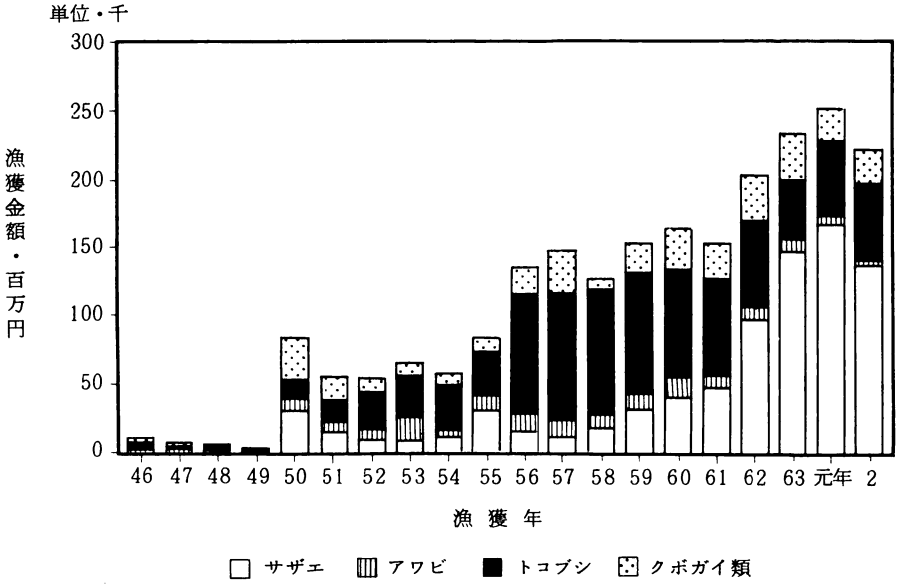


図9－1．大島の貝類の種類別漁獲金額

1） 大島の貝類の種類別漁獲金額（東京都の水産から）

① 昭和51年以降昭和61年までトコブシの漁獲金額が最も多かったが、昭和62年からはサザエが1位を占めている。

② サザエの20年間の平均漁獲金額は、40百万円(26％)で、トコブシの45百万円(29％)に及ばないが、最近5年間平均では117百万円と貝類全体の53％を占め最も多くなっている。

・ 他の種類の最近5年間の平均漁獲金額と構成比を以下に示した。

トコブシ	58百万円（29％）	クボガイ類	29百万円（14％）
アワビ	8百万円（4％）		

③ トコブシは、昭和50年に10百万円に達して以来増加を続け、昭和57年には最高の93百万円を漁獲し、貝類全体の73％を占めたが以後減少し、昭和63年にはわずか44百万円になった。平成に入ってからは若干持ち直し、平成2年では57百万円であった。

④ クボガイ類は、昭和59年以降20百万円台から30百万円台で推移し、昭和63年には20年間で最高の35百万円を漁獲した。

⑤ アワビは、20年間の最高は昭和53年の17百万円で、最近減少傾向を示し、平成2年にはわずか5百万円であった。

9．大　島　の　貝　類　漁　獲　金　額

2)　漁協漁獲金額全体に占める貝類漁獲金額の割合

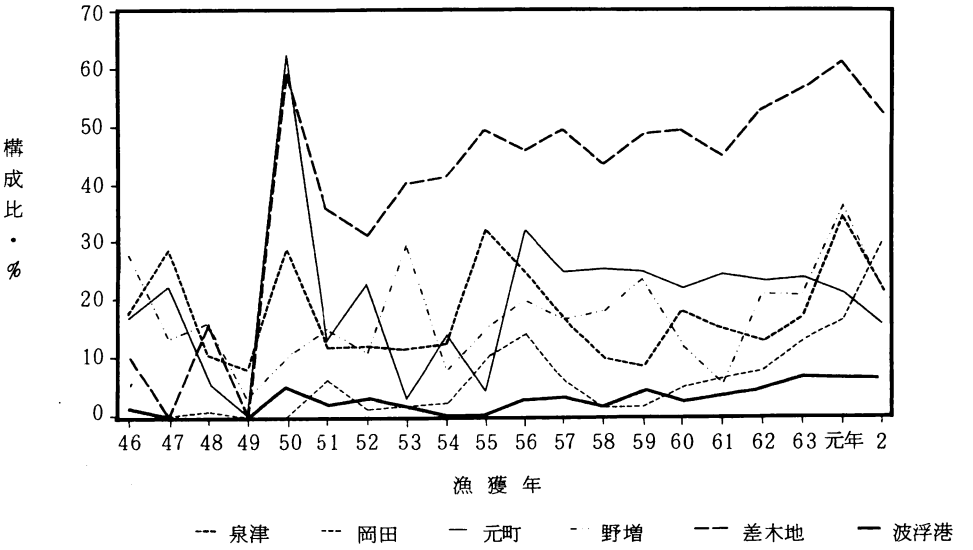


図９－２．大島の漁協別漁獲金額全体に占める貝類漁獲金額の割合

3)　大島の漁協別漁獲金額全体に占める貝類漁獲金額の割合（東京都の水産から）

①　漁協別の貝類漁獲金額と全漁獲金額に占める割合の20年間平均と最近５年間平均を以下に示した。

20年間平均では、

泉　津	６百万円（18%）	岡　田	６百万円（６%）
元　町	13百万円（20%）	野　増	８百万円（17%）
差木地	66百万円（39%）	波浮港	13百万円（３%）

５年間平均では、

泉　津	７百万円（20%）	岡　田	16百万円（15%）
元　町	22百万円（22%）	野　増	13百万円（21%）
差木地	127百万円（54%）	波浮港	28百万円（５%）

②　貝類漁獲金額の割合は差木地漁協で高く、昭和52年以降徐々に増加し、平成元年には全漁獲量の実に61%に達した。

③　最近では、岡田漁協で貝類漁獲金額の割合が高くなってきており、昭和59年には百万円で漁業全漁獲金額のわずか1.５%であったものが、昭和63年には10%を越え、平成２年には38百万円で全漁獲金額の30%を占めた。

10. 差木地漁協に於ける採貝漁業の実態（漁獲実態調査から）

漁獲実態調査の漁場の聞き取り結果を表１に、漁場図を図10－１に示した。

表１．漁場聞き取り結果

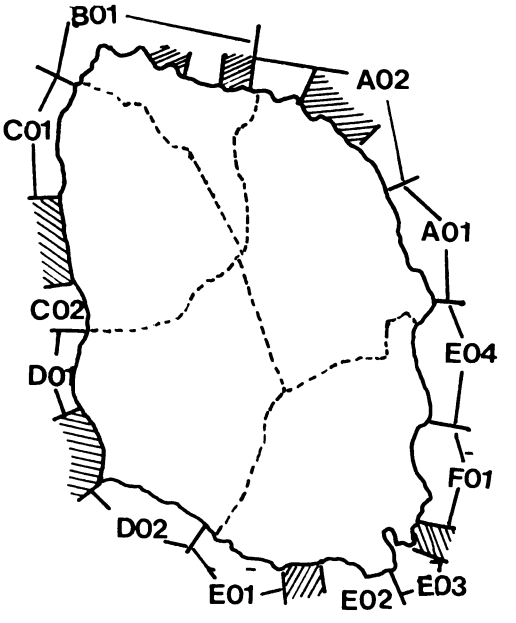
調査年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成２年	合計
漁業従事者（人）	46	48	49	48	48	239
年間延べ従事者（人）	5,573	6,618	6,442	6,617	6,458	31,708
漁場判明者（人）	4,187	5,777	5,052	5,035	2,793	22,844
漁場不明者（人）	1,386	841	1,390	1,582	3,665	8,864
判明率（%）	75.1	87.3	78.4	76.1	43.2	72.0

差木地漁協に於ける昭和61年から５年間の延べ採貝漁業従事者総数は、31,708人で、そのうち72%に当たる22,844人の操業漁場を聞き取ることができた。

一般漁場に於ける漁場不明者については、下記式から各漁場別の全従事者数及び漁獲量を推定した。

漁場別従事者推定数＝（全従事者数－禁漁区従事者数）×
（漁場従事者数÷一般漁場での漁場判明全従事者数）

漁場別漁獲量推定量＝（全漁獲量－禁漁区漁獲量）×
（漁場漁獲量÷一般漁場での漁場判明全漁獲量）



A01	ミミズ浜	A02	公園下～ナナミ沢	B01	ゴイシ～ケイカイ
C01	マンタテ～イズミ浜	C02	元町～ケタ	D01	学校下～竜の口
D02	センバ～オオバエ	E01	ヒノキバ～ツヅキネ	E02	ヨコブチ～トウシキ
E03	ヤセ～波浮港	E04	黒崎～トウフジマ	F01	カヤバシタ～カキハラ

図10－1．漁　場　図

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

1) 採貝漁業従事者

(1) 採貝漁業従事者：a．従事者数の推移

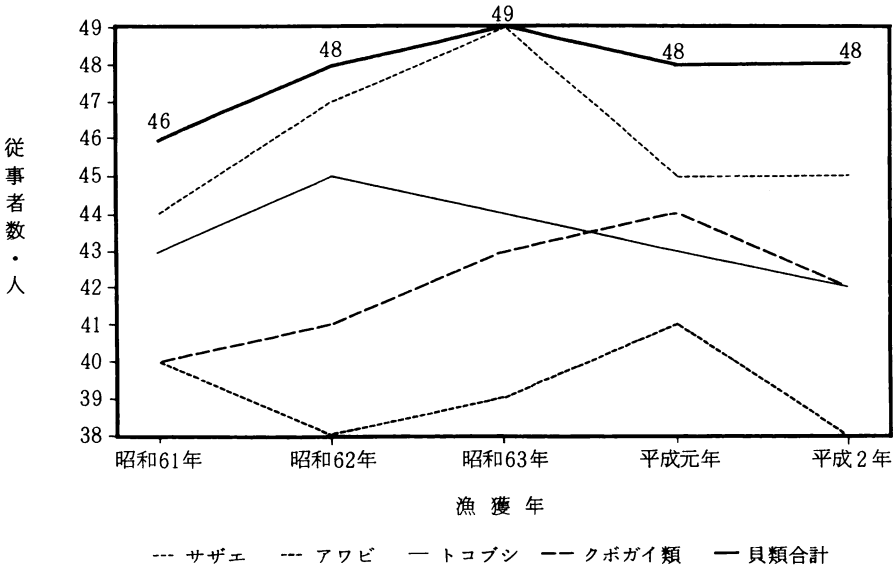


図10－2．採貝漁業従事者数の推移

1) 採貝漁業従事者（漁獲実態調査から）

(1) 採貝漁業従事者

a．従事者数の推移

① 5年間の採貝漁業従事者は、46人から48人と大きな変動はない。しかし、個人別についてみると、昭和61年から平成2年まで継続して採貝漁業に従事している漁業者は、41人でこの間に5人が減り、新たに7人加わっている。

② 種類別の従事者数をみると、採貝漁業に従事した漁業者の9割以上がサザエ、トコブシを採っている。

5年間の平均値を以下に示した。

サザエ	46人（96%）	トコブシ	43人（91%）
クボガイ類	42人（88%）	アワビ	39人（82%）

③ サザエが異常発生した昭和63年には、採貝漁業に従事した全ての漁業者がその年少なくとも1日以上サザエの漁獲に従事していた。

④ トコブシ漁獲従事者は、昭和62年の45人をピークに減少し、平成2年には42人になった。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

1) 採貝漁業従事者

(1) 採貝漁業従事者：b．種類別年間従事日数

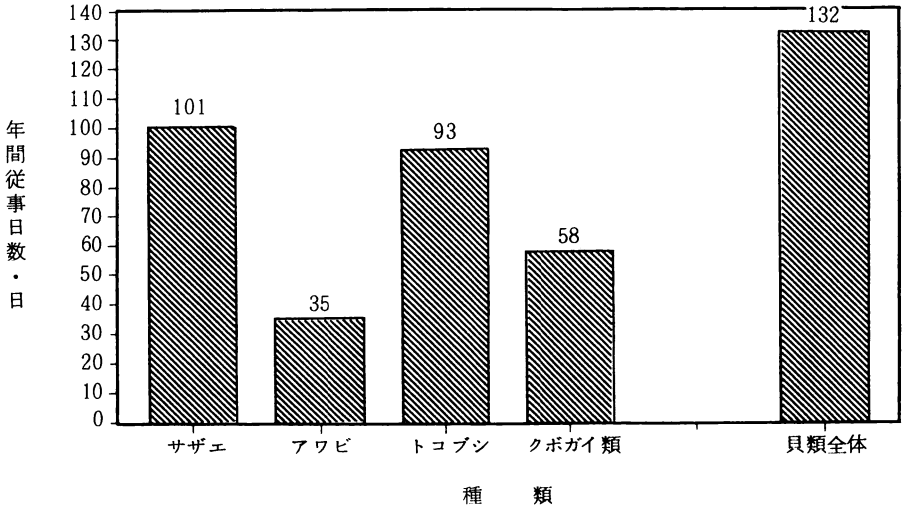


図10－3．種類別年間従事日数

b．種類別年間従事日数（漁獲実態調査から）

① 貝類全体では、漁業者1人当たり年間平均132日採貝に従事している。

5年間の推移を見ると、三原山の噴火のあった昭和61年を除き、漁獲量の最も多かった昭和63年が131人で最も少なくなっている。

漁業者別の年間従事日数を種類別に表2に示した。

表2．種類別年間従事日数の推移

操業年	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年
貝類全体	121	138	130	138	135
サザエ	92	97	112	95	94
アワビ	42	44	32	28	30
トコブシ	95	101	75	89	100
クボガイ類	66	56	63	45	49

② 種類別にみると、貝類全体としては従事者数が少なかった昭和63年にサザエでは112日と最大を示し、逆にトコブシは75日と最低であった。

これは、サザエ漁獲量の増加により、サザエの禁漁期間の7、8月に他の貝類の操業を控えたためである。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

1) 採貝漁業従事者

(1) 採貝漁業従事者：c．漁業者別年間従事日数

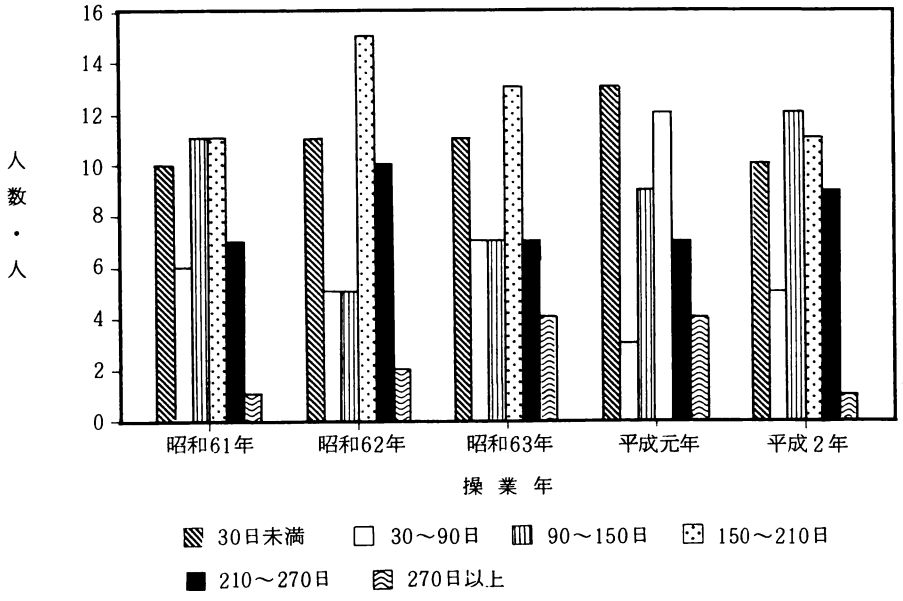


図10－4．漁業者別年間従事日数

c．漁業者別年間従事日数（漁獲実態調査から）

年間採貝漁業従事日数を30日未満から270日以上の範囲で6階級に分け、5年間の推移を図10－4に示した。

① 5年間を通じ年間従事日数が90日以上の漁業者は31人であった。またその割合は全体の約65％と大きな変動はない。

② 最近、90－150日の従事者が増加（昭和62年10.4％→平成2年25％）し、150－210日の従事者が減少（昭和62年31.3％→平成2年22.9％）してきている。

③ 年間270日以上従事している漁業者は、5年間平均では1名でその平均従事日数は286日であるが、サザエの漁獲量の増加した昭和63年、平成元年には4名で、最高はそれぞれ299日と298日であった。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

1) 採貝漁業従事者

(2) 種類別年間延べ従事者数

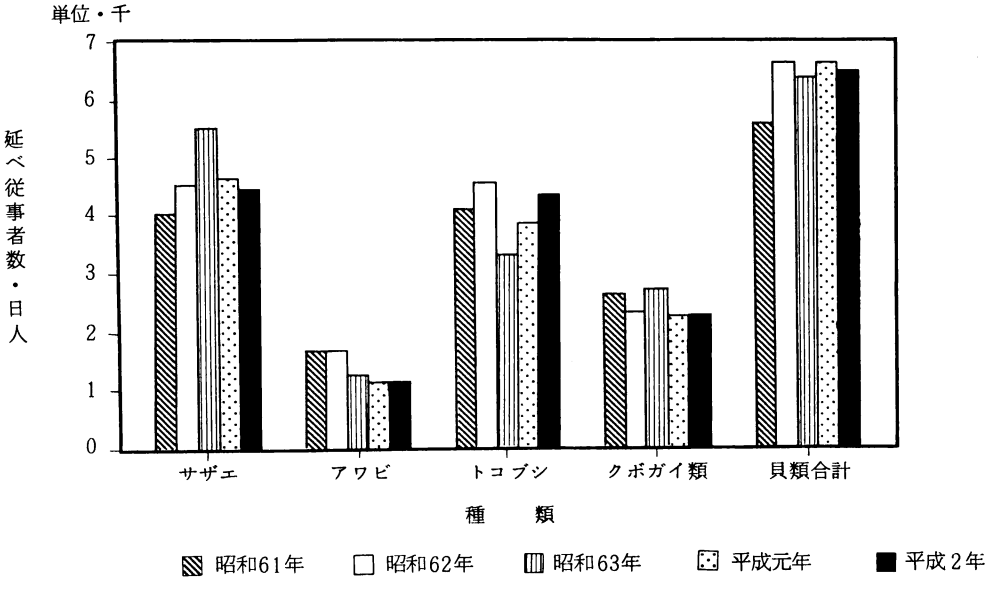


図10－5．種類別年間延べ従事日数

(2) 種類別年間従事者数（漁獲実態調査から）

年間延べ従事者数の5年間の推移を種類別に図10－5に示した。

① 貝類全体では、三原山の噴火した昭和61年を除き、漁獲量が最も多かった昭和63年が最低で6,442人であった。

5年間の平均延べ従事者数は6,342人である。以下に種類別の年間延べ従事者数の5年間の平均を示した。

サザエ	4,651人	アワビ	1,378人
トコブシ	4,033人	クボガイ類	2,442人

② サザエは、漁獲量の最も多かった昭和63年が 5,581人で最大で、平成に入ってからは、4,000人台で推移している。

③ アワビは、平均1,378人で4種類中最も少なく、昭和62年の1,676人をピークに最近減少し、平成2年には1,151人になった。

④ トコブシは、昭和62年まで4種類中最も多かったが、以後サザエ従事者の増加にともない減少し、昭和63年には最低の3,347人になったが、平成2年にはサザエ資源の減少とともに、再び4,000人台に回復した。

⑤ クボガイ類は、昭和63年2,780人と最大を示したが、5年間を通し2,500人前後で大きな変動はない。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

1) 採貝漁業従事者

(3) 月別延べ従事者数：a．月平均従事者数

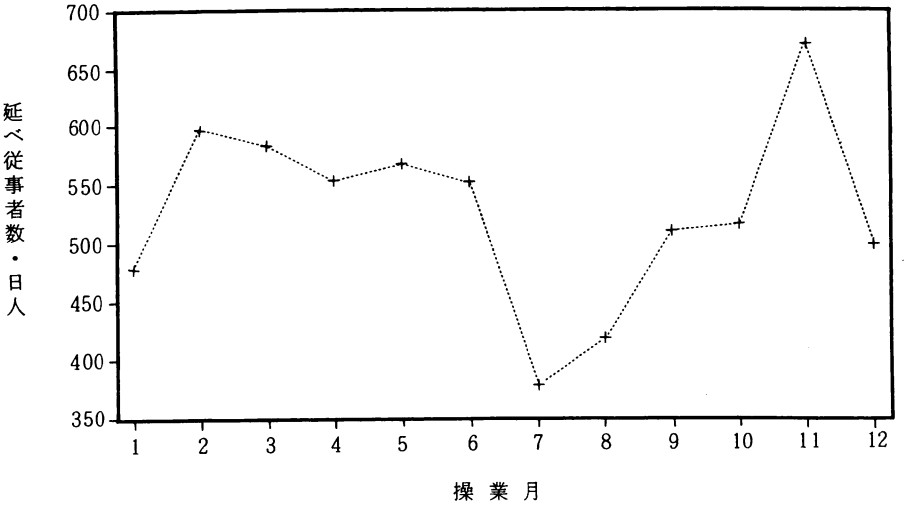


図10－6．月別平均延べ従事者数

(3) 月別延べ従事者数（漁獲実態調査から）

a．月平均従事者数

① 月平均の採貝漁業延べ従事者数は528人で、11月の従事者数が671人で最も多く、最低は7月の378人である。

月別平均延べ従事者数は以下のとおりであった。

1月	478人	2月	599人	3月	584人	4月	554人
5月	568人	6月	552人	7月	378人	8月	418人
9月	511人	10月	516人	11月	671人	12月	512人

② 7月少ないのは、サザエの禁漁期間（7－8月）に入ることとクボガイ類の自主禁漁期間（7月）に当たるためである。

③ 9月から11月にかけての増加は、サザエ（9月）とトコブシ（11月）の禁漁期明けになるためである。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

1) 採貝漁業従事者

(3) 月別延べ従事者数：b．種類別比較

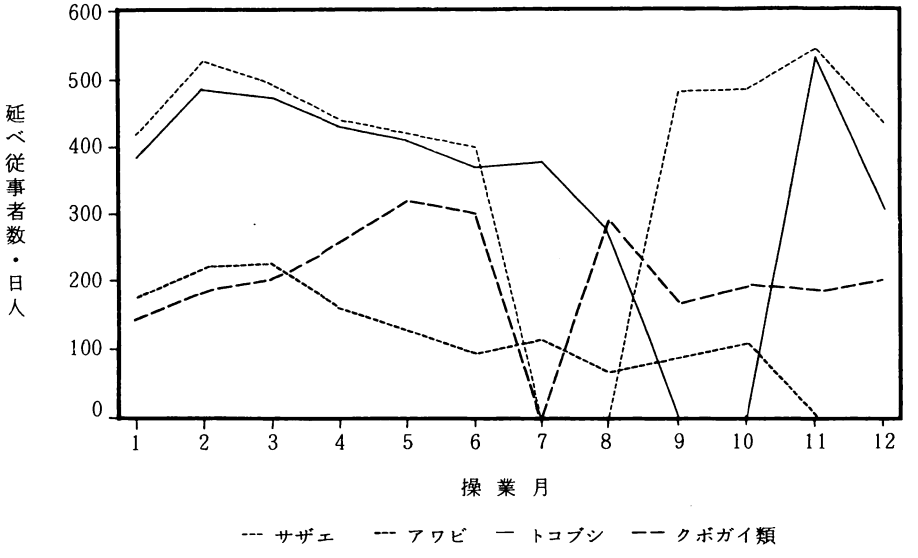


図10－7．月別延べ従事者数の種類別比較

b．種類別比較（漁獲実態調査から）

① 種類別の月平均延べ従事者数を以下に示した。

サザエ	465人	アワビ	138人
トコブシ	403人	クボガイ類	222人

② サザエでは、禁漁期開けの9月から冬季にかけて多く、最大は11月の543人である。

③ アワビでは、夏場の従事者は少なく、1月から3月の冬場3カ月間に全体の45％が集中し、3月最も多くて227人となっている。

④ トコブシは、サザエ同様に年間を通して平均しているが、夏場8月の従事者数が268人で最も少なくなっている。11月は禁漁期開けで531人と最も多くなっている。

⑤ クボガイ類は、自主規制期の7月をはさんだ春先と夏場多く、5月が319人で最大で、最低は1月の145人である。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

1) 採貝漁業従事者

(4) 漁場別延べ従事者数：a．年間平均延べ従事者数

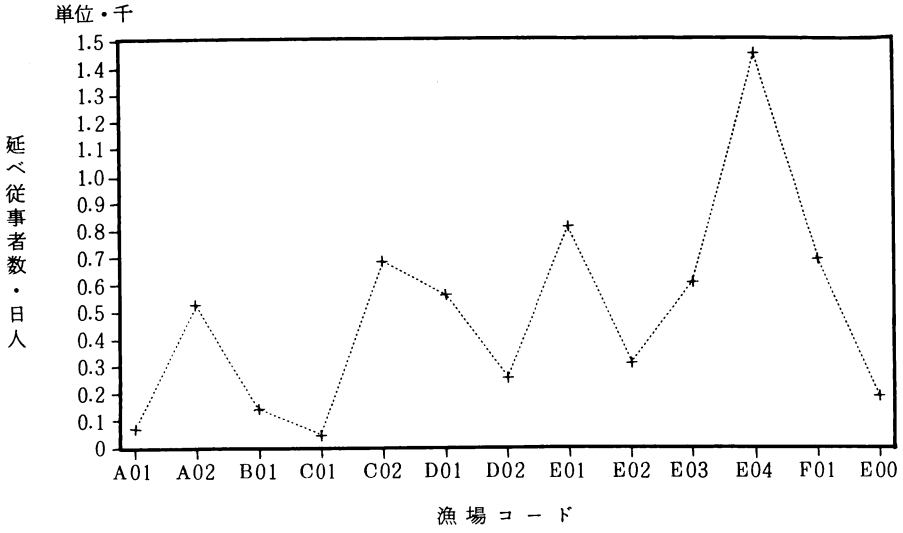


図10－8．漁場別年間平均延べ従事者数

(4) 漁場別延べ従事者数（漁獲実態調査から）

a．年間平均延べ従事者数

① 最も利用者が多い漁場は、E04（通称奥山磯）漁場で、1年間で全体の約23％に当たる 1,437人が利用している。また、旧差木地漁協の地先に当たる、E01漁場からE04漁場及び禁漁区E00漁場での従事者数は3,350人で全体の53％に当たる。

5年間平均の漁場別年間従事者数は以下のとおりであった。

A01	68人（1％）	A02	556人（9％）
B01	143人（2％）	C01	46人（1％）
C02	686人（11％）	D01	556人（9％）
D02	253人（4％）	E01	813人（13％）
E02	320人（5％）	E03	580人（9％）
E04	1,437人（23％）	F01	686人（11％）
E00	197人（3％）		

② E04漁場では、昭和61年の年間従事者が 1,909人で全体の34％を占めていたが、三原山の噴火後、翌年には 1,316人と20％に激減した。その後、昭和63年のサザエの大量発生で一時増加したが、平成元年、2年と20％前後で推移している。

③ 三原山の噴火の翌年の昭和62年には、E04漁場に代わりA02、C02、D02及びE02漁場での操業者が前年の2倍前後に増加した。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

1) 採貝漁業従事者

(4) 漁場別延べ従事者数：b．種類別比較

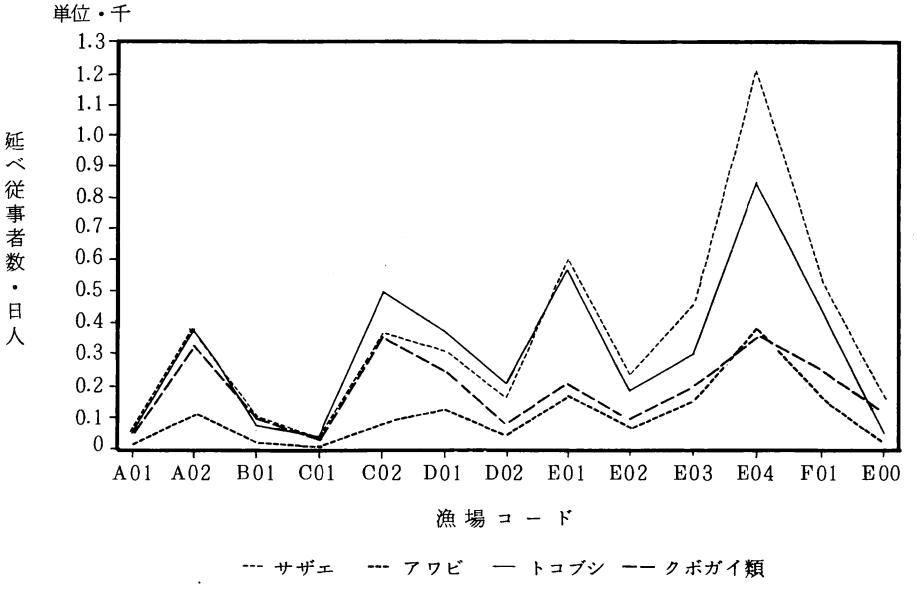


図10－9．漁場別従事者数の種類別比較

b．種類別比較（漁獲実態調査から）

種類別の年間延べ従事者数の5年間の平均を漁場別に求め、図10－9に示した。

① 4種類ともE04漁場利用者が最も多く、5年間の平均従事者数と全体に占める割合はそれぞれ以下の通りであった。

サザエ	1,216人（26%）	アワビ	384人（28%）
トコブシ	851人（21%）	クボガイ類	359人（15%）

F01漁場は4種類で全体の10%以上を占め、E01漁場はサザエ、アワビ、トコブシで、C02漁場はトコブシ、クボガイ類で、E03漁場はサザエ、アワビでそれぞれ全体の10%以上を占め、漁業者の利用が多くなっている。

③ 他の漁場では、A02漁場とD01漁場でクボガイ類漁業従事者の割合が10%台を占め多くなっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(1) 年間漁獲量：a．種類別漁獲量

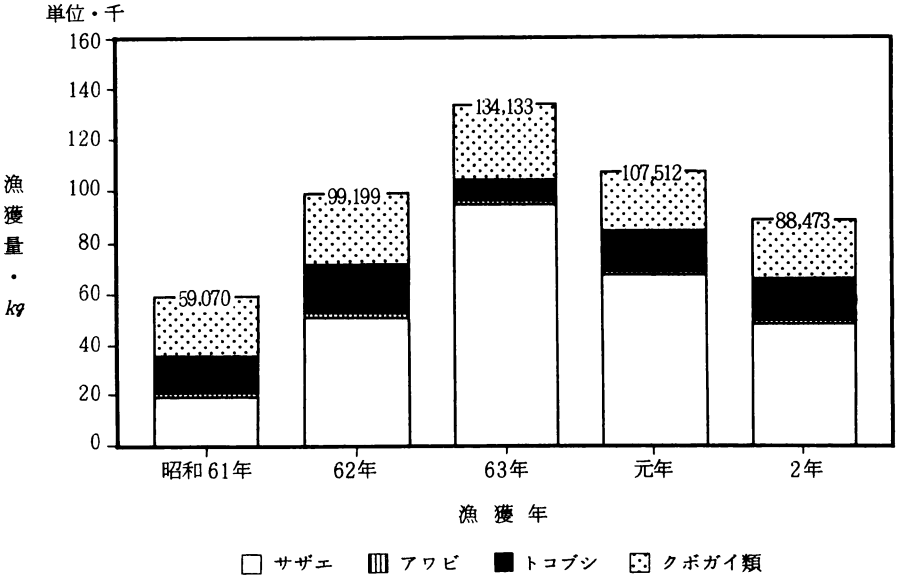


図10－10. 差木地漁協の貝類の種類別年間漁獲量の推移

(1) 年間漁獲量（漁獲実態調査から）

a．種類別漁獲量の推移

① 貝類合計の5年間の年間平均漁獲量は97,677kgで、昭和63年の134,133kgを最高に、平成2年の漁獲量は、昭和63年の7割弱に減少している。

② 5年間の年間平均漁獲量を種類別にみると、サザエが最も多く56,195kg、ついでクボガイ類の25,389kg、トコブシ14,809kg、アワビ1,283kgとなっている。

③ サザエは、昭和63年94,627kgと過去最高の漁獲量であった。

これは、昭和60年ないし昭和61年群を主体にする資源の大量発生によるものであると考える。しかし、昭和63年をピークにその後減少してきているが、平成2年の漁獲量は昭和61年の約2.5倍を依然維持している。

④ トコブシは、サザエの漁獲量に反比例した増減傾向を示し、昭和63年には最低の8,102kgであった。平成2年には、17,014kgを漁獲し回復傾向にある。

⑤ クボガイ類の漁獲量の増減は、サザエと正の相関をしめし、昭和63年30,271kgと最高を記録した。

⑥　アワビは最近減少傾向をしめし、昭和61年の1,805kgから毎年減少し、平成2年には昭和61年の約4割の765kgに減った。

この原因は、資源の減によるものなのか、漁獲努力が依然サザエ等の表在性の貝類に向いている為なのか明確でないが、平成元年以降サザエが減りトコブシの漁獲が回復しつつあるにもかかわらず、アワビ漁獲量が回復しないのは、資源そのものが減少しているのではないかと考える。その要因として、禁漁期間中の“アワトコ”と称した殻長制限以下の小型アワビの漁獲が影響している。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(1) 年間漁獲量：b．種類別構成

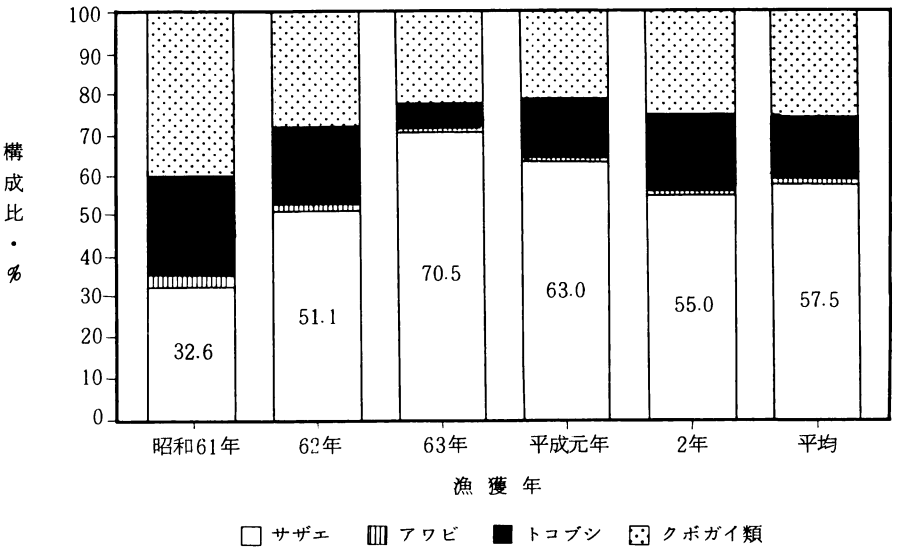


図10－11. 種類別年間漁獲量構成の推移

b．種類別年間漁獲量構成（漁獲実態調査から）

① 5年間の平均では、サザエが57.5%を占めて最も多くなっている。

アワビ 1.3%　トコブシ 15.2%　クボガイ類 26.0%

② サザエは、昭和61年の32.6%から増加し、昭和63年には全漁獲量の70.5%を占めた。しかし、その後減少し、平成2年の構成比は55%になっている。

③ トコブシは、昭和61年24.3%でサザエに次いで大きな割合を占めていたが、昭和63年にはわずか6%に低下した。最近では10%台に回復し、平成2年には15.2%を占めた。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(2) 月別漁獲量：a．平均漁獲量

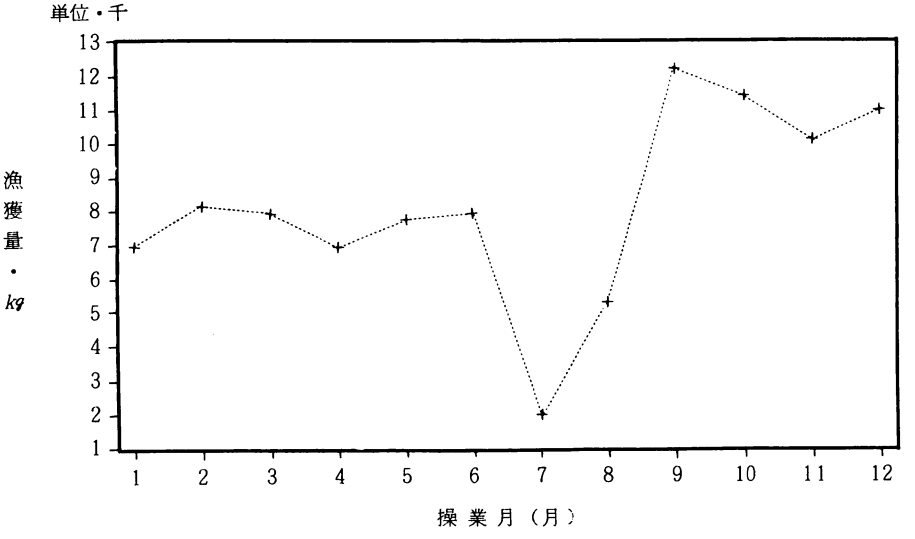


図10－12. 貝類全体の月別平均漁獲量

(2) 月別漁獲量（漁獲実態調査から）

a．平均漁獲量

① 9月が年間を通して最も多く、5年間の平均漁獲量は12,206kgで、年間漁獲量の12.5%を占めている。逆に最も少ない月は7月の1,960kgでわずか2.0%になっている。

② 全体的には、9月から12月にかけて月間漁獲量が10t以上と多く、7、8月の夏場少なくなっている。

③ 7、8月少ない要因としては、サザエが禁漁になり、クボガイ類が1ヶ月間の自主規制期間にあたるためと考えられる。

一方、9月以降多くなるのは、サザエが9月、トコブシが11月に口開けされるためである。特に昭和62年以降はサザエの大量発生の影響でその傾向が強くなっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(2) 月別漁獲量：b．種類別比較

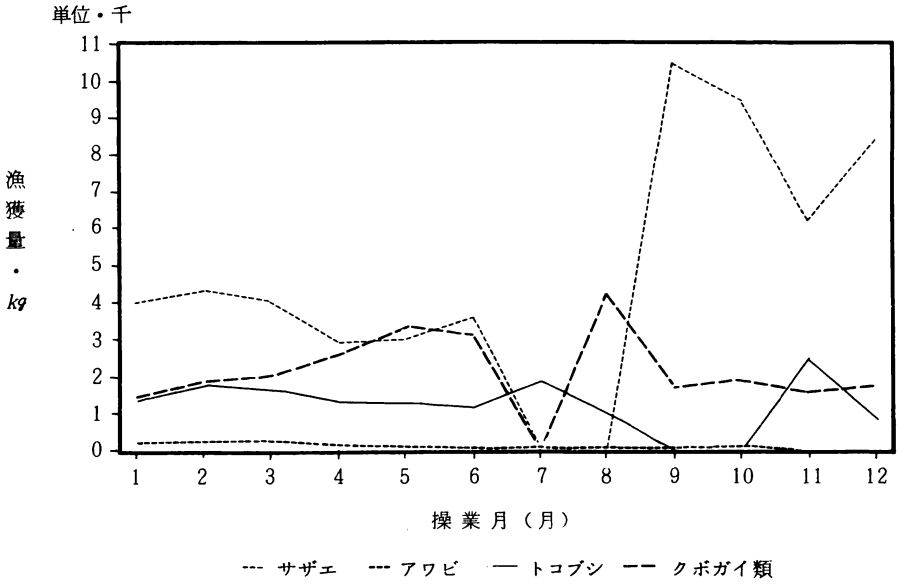


図10－13. 種類別の月別平均漁獲量

b．種類別比較（漁獲実態調査から）

① サザエは、禁漁開けの9月最も多く10,426kgで年間の18.5%を漁獲している。一方、1月から禁漁前の6月までの期間は少なく、最低は4月の2,907kgである。

② アワビは、冬場の1月から3月にかけて多く、いずれの月も 200kg以上を漁獲し、この3カ月間で年間漁獲量の55%を漁獲している。最高月は、3月の256kg(19.9%)である。

③ トコブシは、年間を通してほぼ平均して漁獲しているが、禁漁期開けの11月と、サザエ、クボガイ類が漁獲できない7月に多くなっている。最高月は、11月で 2,421kg(16.3%)である。

④ クボガイ類は、春から初夏にかけての4月から6月と自主規制期間開けの8月が年間漁獲量の10%以上を漁獲し多くなっている。最高月は、8月で4,196kg(16.5%)である。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(2) 月別漁獲量：c．種類別構成比

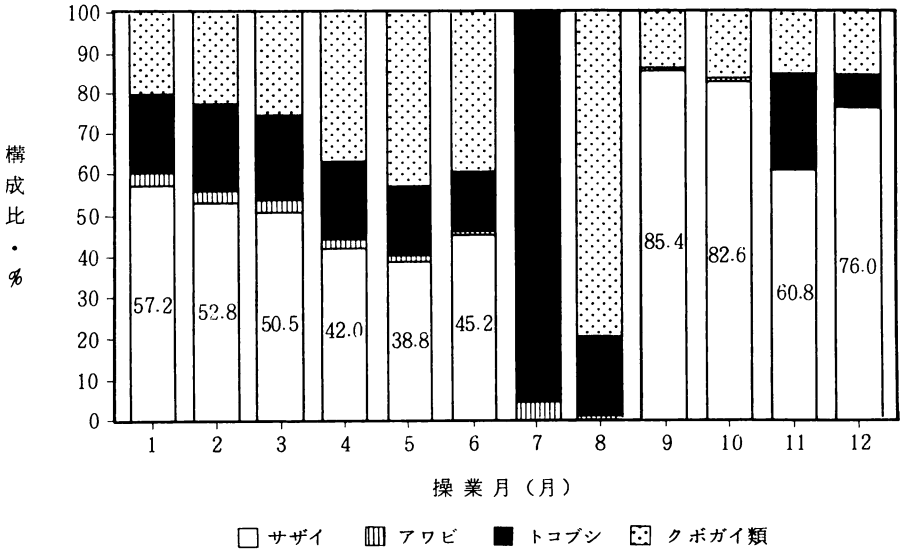


図10－14. 月別平均漁獲量の種類別構成

c．種類別構成比（漁獲実態調査から）

① サザエは、9月全漁獲量の85.4%を占め、最も多く、以後5月の38.8%まで漸次減少傾向をたどる。しかし、5月と禁漁期間の7、8月を除きいずれの月でも貝類の中では最も高い割合を占めている。

② アワビは、年間いずれの月でも5%以下と少なく、最も高い月は7月の4.6%である。

③ トコブシは、サザエ、クボガイ類が禁漁、自主規制期間になる7月95.4%を占め最も高くなっている。他の月では、禁漁期の9、10月と12月を除き20%前後で大きな変動はない。なお、12月は漁獲量の低下にともない、構成比も8.2%と低くなっている。

④ クボガイ類は、自主規制開けでサザエの禁漁期間に当たる8月が、79.6%を占めて最も高く、漁獲量の多くなる4月から6月が30%以上を占め高くなっている。特に、5月は42.9%とサザエの38.8%より高くなっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(3) 漁場別年間漁獲量：a．年間平均漁獲量

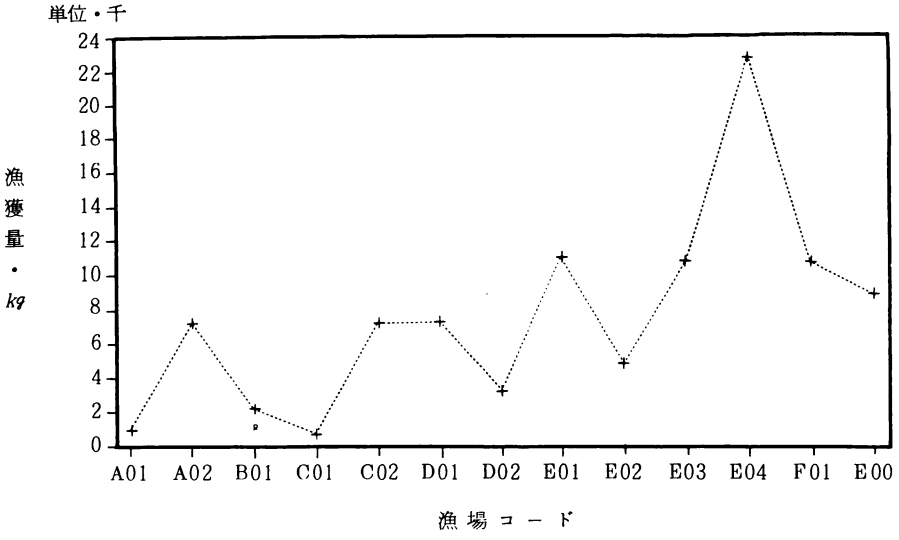


図10－15. 漁場別年間平均漁獲量

(3) 漁場別年間漁獲量（漁獲実態調査から）

a．年間平均漁獲量

① E04漁場が年間平均漁獲量22,725kgで全体の23.3％を占め最も多くなっている。他の漁場では、E01漁場が11,021kg、E03漁場10,761kg、F01漁場10,679kgで多く、全体に占める割合も10％以上になっている。

② 5年間の推移を、昭和61年対比でみるとA01漁場を除きほとんどの漁場で漁獲量の増大がみられ、特に最大の漁獲量を記録した昭和63年の対昭和61年比は、E02漁場で5.1倍、B01、D01、E01、E03漁場でそれぞれ3倍以上になった。

③ 旧差木地磯のE01からE04漁場と禁漁区を含む漁場での漁獲量は、58,141kgで全漁獲量の60％を占めている。この割合は、57％から62％の範囲で5年間大きな変動はない。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(3) 漁場別漁獲量：b．種類別比較

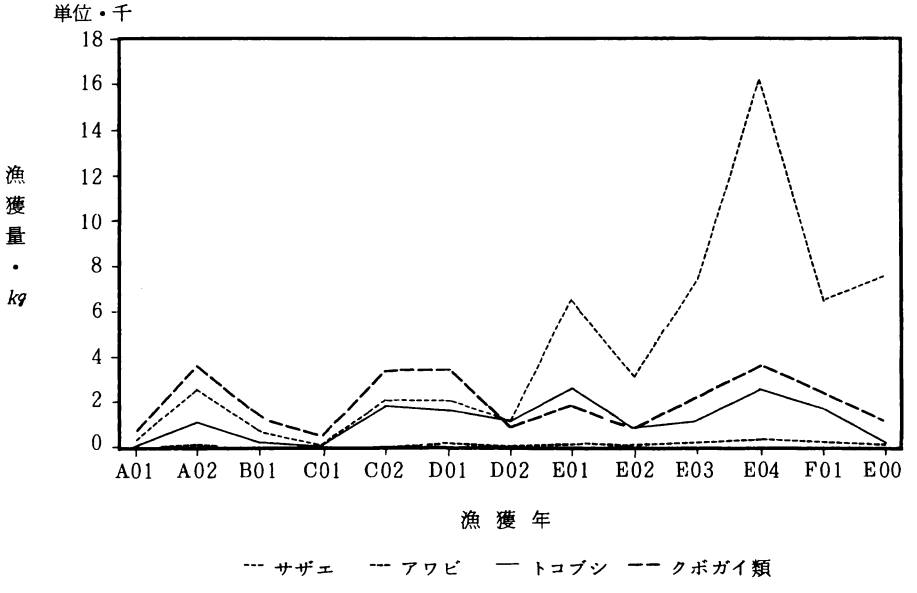


図10－16. 漁場別年間漁獲量の種類別比較

b．種類別比較（漁獲実態調査から）

① サザエは、E04漁場が16,286kgで全体の29%を占めて最も多くなっている。他では、E03、E01、F01漁場で10%以上を占め多くなっている。また、禁漁区の漁獲量は、E04漁場に次いで多く、7,590kgで13.5%を占めている。全体としては、島の南東部での漁獲量が多い。

② アワビでは、年間漁獲量が 100kg以上に達しているのはE04、D01、E03、F01及びE01漁場で、最も多いのはE04漁場の 319kgで全体の24.8%を占めている。

③ トコブシは、2,000kg以上漁獲しているのはE01とE04漁場の2カ所で、そのうちE01漁場が2,589kgと全体の17.5%を占め最も多くなっている。

④ クボガイ類は、ほぼ平均して全島で漁獲しているが年間漁獲量が 3,000kg以上に達しているところは、E04、A02、D01及びC02漁場の4カ所で、そのうちE04漁場が3,616 kgで全体の14.2%を占め最も多くなっている。島の北部海域での漁獲量が多くなっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(3) 漁場別年間漁獲量：c．種類別構成比

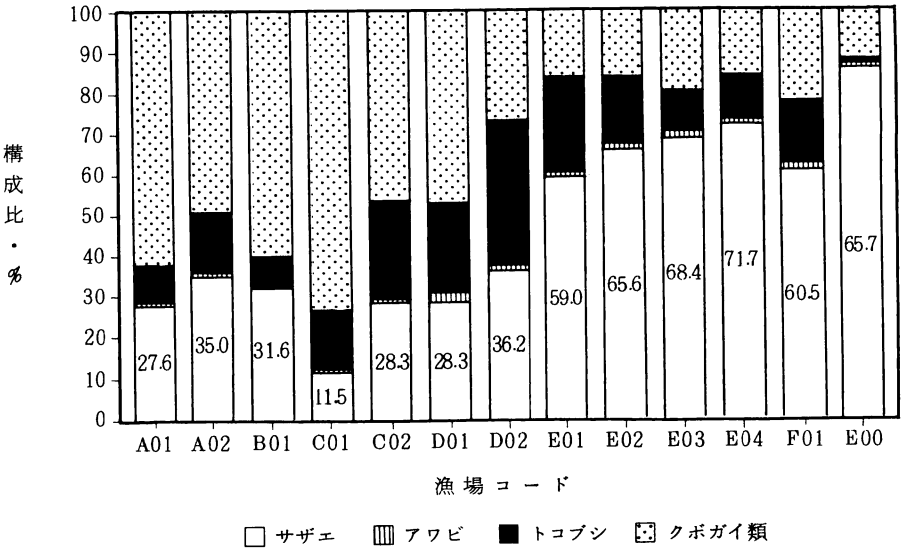


図10－17. 漁場別の種類別漁獲量構成

c．種類別構成比（漁獲実態調査から）

① 大島全体でみると、E01漁場からE04漁場にかけた島の南部の漁場では、サザエの漁獲量割合が50％以上を占めている。一方、A01漁場からD01漁場の分布する島の北部から北西部ではクボガイ類の漁獲量構成が50％前後を占めている。トコブシは、島の西部から南西部のC02漁場からE01漁場で20％以上の構成比を占め、その割合が高くなっている。

② 漁獲量の最も多いE04漁場の種類別構成比は、サザエが71.7％で最も多く、次いでクボガイ類の15.9％、トコブシ11.0％、アワビ1.4％となっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(4) 漁業者別漁獲量：a．年間平均漁獲量

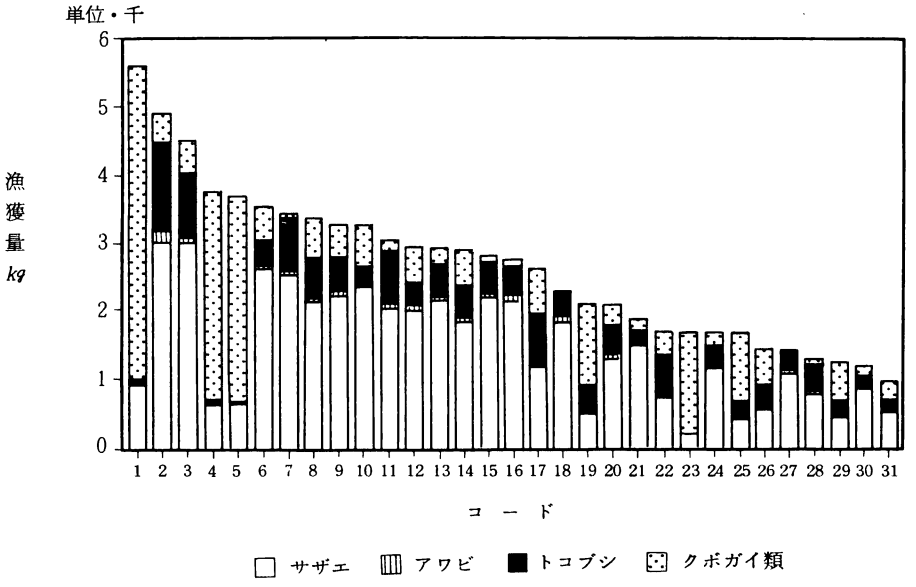


図10－18. 漁業者別年間平均漁獲量

(4) 漁業者別漁獲量（漁獲実態調査から）

差木地漁協に於ける5年間の採貝漁業従事者は56人で、そのうち5年間継続して採貝漁業に従事している漁業者は41人であった。そこで、5年間継続して採貝漁業に従事し、5年間の年間採貝漁業従事日数の平均が90日以上の漁業者31人の漁業実態について調べた。

これら31人の漁業者の平均年齢は48才、最高齢62才、最年少29才であった。なお、このうち磯根漁業の専業者は19人であった。

また、年間の平均採貝漁業従事日数は179日、最高は286日、最低は97日で、31人の年間合計漁獲量の平均は82,343kgで、差木地に於ける貝類漁獲量の92.7%を占めた。

a．漁業者別年間平均漁獲量

① 年間漁獲量1,000kg以上揚げている漁業者が31人中30人であった。最高は5,618kgで、種類別構成をみると、サザエが910kg、アワビ3kg、トコブシ83kg、クボガイ類4,622kgとクボガイ類が全漁獲量の約82%を占めている。

② クボガイ類の漁獲量が50%以上を占めている漁業者は6名で、そのうち3名は漁獲量上位5人の中に入っている。

クボガイ類に依存している漁業者は、単価が安いために大量に漁獲しなければ、高収入が得られないことを示している。

③ 漁業者１人あたりの平均漁獲量は、2,656kgで種類別構成はサザエ1,464kg（55％）、アワビ37kg（１％）、トコブシ439kg（17％）、クボガイ類716kg（27％）で、サザエへの依存度が高くなっている。

④ サザエの漁獲量構成比が50％以上の漁業者は、21人で全体の68％を占めている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(4) 漁業者別漁獲量：b．年別推移

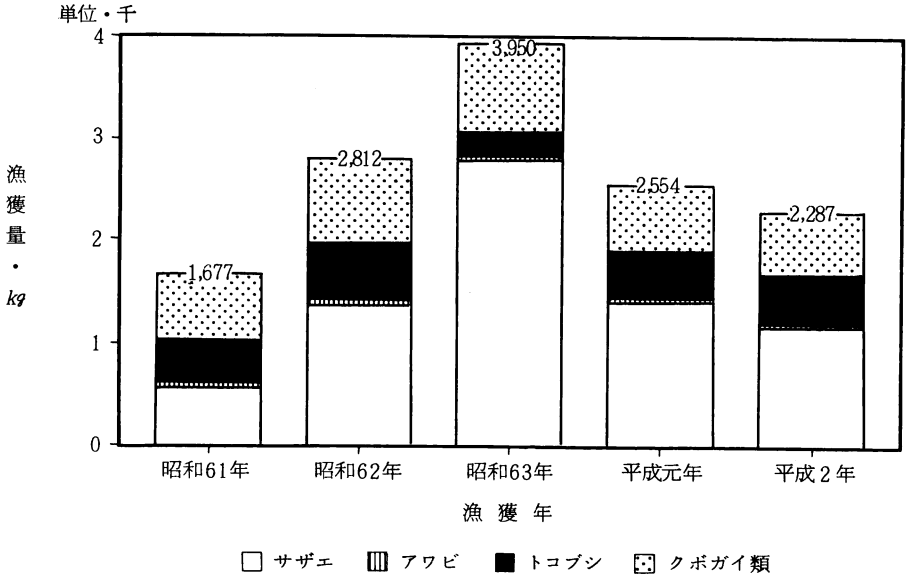


図10－19. 漁業者1人当たりの年間漁獲量の年別推移

b．漁業者1人当たりの年間漁獲量の年別推移（漁獲実態調査から）

① 貝類合計ではサザエが大量発生した昭和63年が 3,950kgで最も多く、昭和61年の約2.5倍であったが、平成に入ってからは減少し、平成2年には2,287kgでその約6割になった。

② 種類別にみると、サザエは、昭和61年 562kgであったのが、昭和63年には約5倍の2,800kgに増加した。その後減少し、平成2年には1,171kgであった。

③ アワビは、昭和62年49kgで最大を示した後減少し、平成2年にはわずか23kgになった。

④ トコブシは、昭和63年245kgと最低になったが、平成2年には約2倍の492kgに増加している。

⑤ クボガイ類は、昭和63年最高の869kgを漁獲した後減少し、平成2年には601kgになっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(4) 漁業者別漁獲量：c．種類別構成

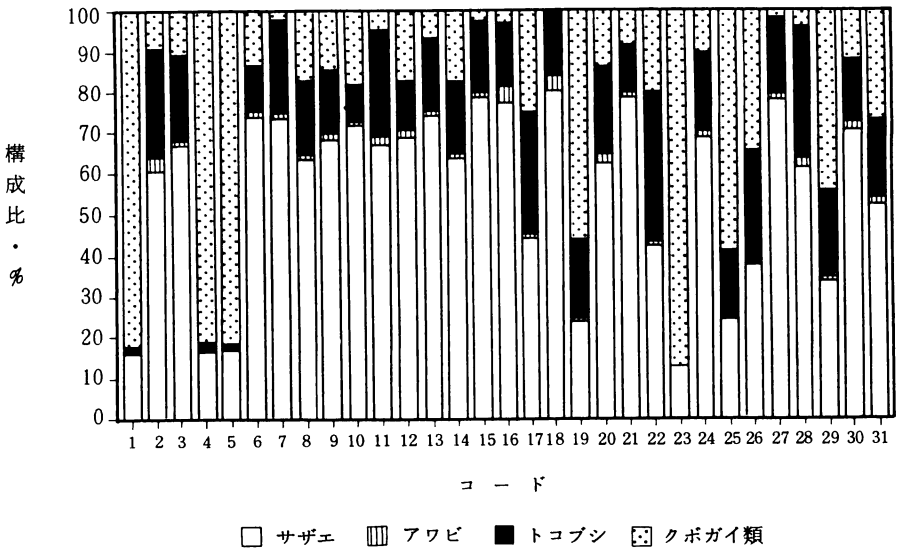


図10－20. 漁業者別の年間漁獲量の種類別構成

c．漁業者別の年間漁獲量の種類別構成（漁獲実態調査から）

① 漁業者１人当たりの年間漁獲量の種類別構成比が50％以上を占めている種類は、サザエとクボガイ類で、サザエでは31人の漁業者中21人、クボガイ類は６人であった。

② 漁獲量上位５人のうち３人はクボガイ類漁獲量構成比が80％以上を占めている。

③ 種類別の構成比の平均は、サザエ55％、アワビ１％、トコブシ17％、クボガイ類27％となっている。

④ トコブシ漁獲量構成比が20％以上占めている漁業者は10人で、そのうち最も高いのは37％であった。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(4) 漁業者別漁獲量：d．年間延べ従事日数と漁獲量

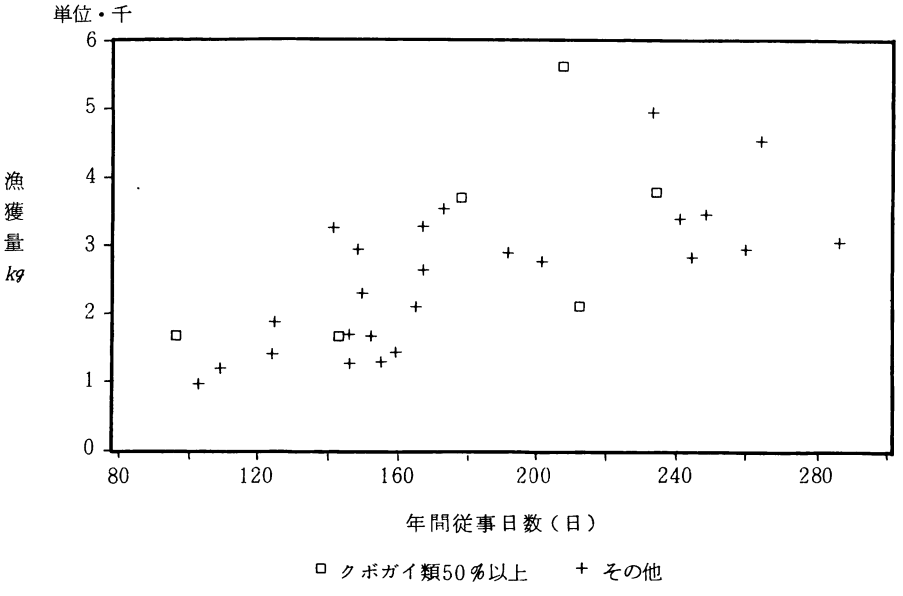


図10－21. 年間延べ従事日数と漁獲量の関係

d．年間延べ従事日数と漁獲量の関係（漁獲実態調査から）

① 延べ従事日数 180日前後までは、従事日数に比例し漁獲量の増大がみられるが、それ以上では3,500～4,000kgの範囲で横ばいになっている。

② この傾向は、依存している種類に関係なくみられる。

③ 年間延べ従事日数が286日で最大の漁業者の場合、年間漁獲量は3,050kg、最高の漁獲量を揚げている漁業者では208日で5,618kgとなっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

（4）漁業者別漁獲量：e．年齢と漁獲量

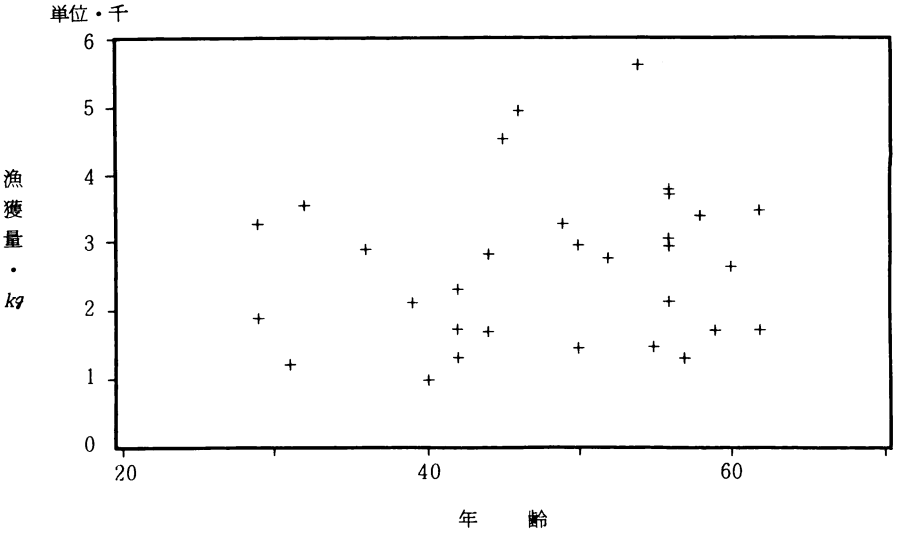


図10－22. 年齢と漁獲量の関係

e．年齢と漁獲量の関係（漁獲実態調査から）

平均年齢48才、最高齢62才、最年少29才の漁業者の年齢と年間漁獲量の関係を図10－21に示した。なお、漁業者の年齢は平成2年に於けるものである。

① 年間漁獲量と年齢の間に相関はみられない。

② 4,000 kg以上漁獲している漁業者3人の年齢は45才以上で、最高漁獲量をあげている漁業者の場合50才台の高齢者である。

③ 年齢階級別の年間平均漁獲量を以下に示した。

20才台（2人） 2,587kg、 30才台（4人） 2,437kg

40才台（9人） 2,612kg、 50才台（13人） 2,779kg

60才台（3人） 2,592kg

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(5) クボガイ類漁獲量について：a．漁獲量構成

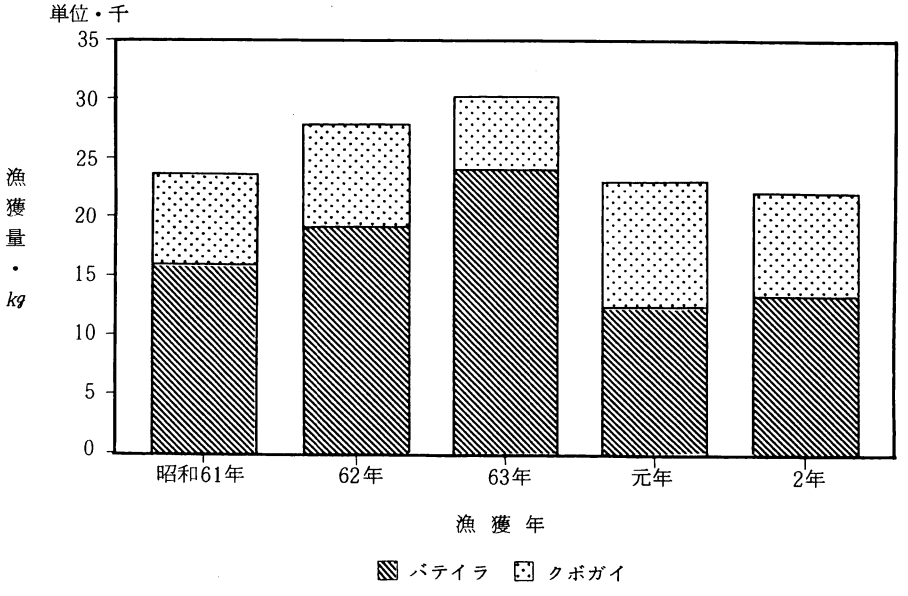


図10－23. クボガイ類の漁獲量の推移

(5) クボガイ類漁獲量（漁獲実態調査から）

クボガイ類は、すでに述べたとおりヘソアキクボガイを主とするクボガイの仲間を指すメッカリとバテイラを指すシッタカを含んでいる。漁協への水揚げは、メッカリとシッタカに分けて行われる。単価はシッタカが若干高い。そこで、昭和61年から平成2年までの5年間の漁獲量の変化と漁場別漁獲量を2種類に分けて調べた。

a．クボガイ類の漁獲量の推移

① クボガイ類の5年間の平均漁獲量は25ｔで、昭和63年の30ｔを最高に減少を示している。

② 昭和61年から63年にかけて漁獲量の増加は、バテイラの漁獲量の増による。

増加の要因については、バテイラがクボガイと違い比較的深い場所にも生息する表在性の貝類のため、昭和63年をピークとするサザエの大量発生とそれにともなう漁獲努力量の増加により、似た分布を持つバテイラがサザエと共に漁獲された為と考えられる。

③ 漁獲量構成は、5年間平均でバテイラ67％に対し、クボガイ33％となっている。しかし、平成元年以降クボガイの割合が40％を超え多くなっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

2) 採貝漁業漁獲量

(5) クボガイ類漁獲量について：b．漁場別漁獲量

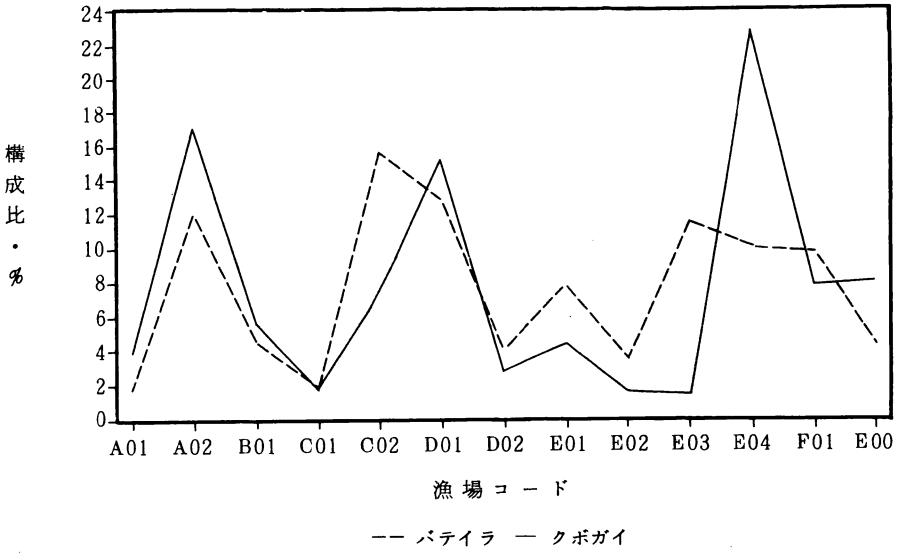


図10－24. クボガイ類の漁場別漁獲量

b．クボガイ類の漁場別漁獲量（漁獲実態調査から）

① バテイラが比較的広範囲で漁獲されているのに対し、クボガイはE04、A02及びD01漁場に漁獲が集中し、この3漁場で全漁獲量の55%を漁獲している。

② バテイラではC02漁場の16%が最も高く、他ではA02、D01、E03及びE04漁場が10%以上の割合を占め、他に比べ高くなっている。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

3) ＣＰＵＥ

(1) 貝類全体ＣＰＵＥ：ａ．年別比較

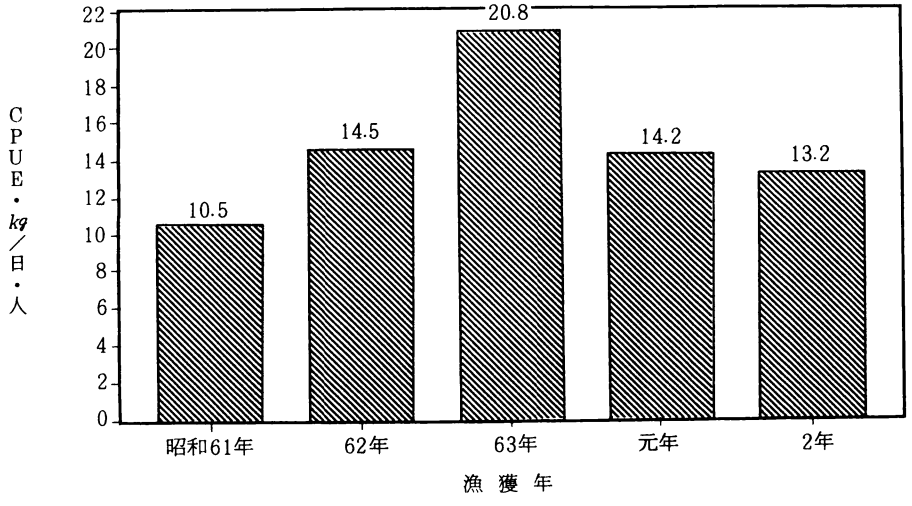


図10－25. 貝類全体ＣＰＵＥの年別比較

3) ＣＰＵＥ（漁獲実態調査から）

昭和61年から平成２年までの５年間継続して採貝漁業に従事し、更に年間の採貝漁業従事日数の平均が90日以上の漁業者31人について延べ漁業従事者数に対する漁獲量の比からＣＰＵＥ（単位努力量当たりの漁獲量）を求めた。

(1) 貝類全体のＣＰＵＥ

ａ．年別比較

図10－25に貝類全体についてのＣＰＵＥを年別に求め、その年別推移を示した。

① 昭和63年が最も高くて、20.8kg／日・人であった。

② 昭和63年をピークにその後減少し、平成２年には13.2kg／日・人に減った。減少の原因は、サザエ漁獲量の減による。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

3) ＣＰＵＥ

(1) 貝類全体ＣＰＵＥ：ｂ．月別比較

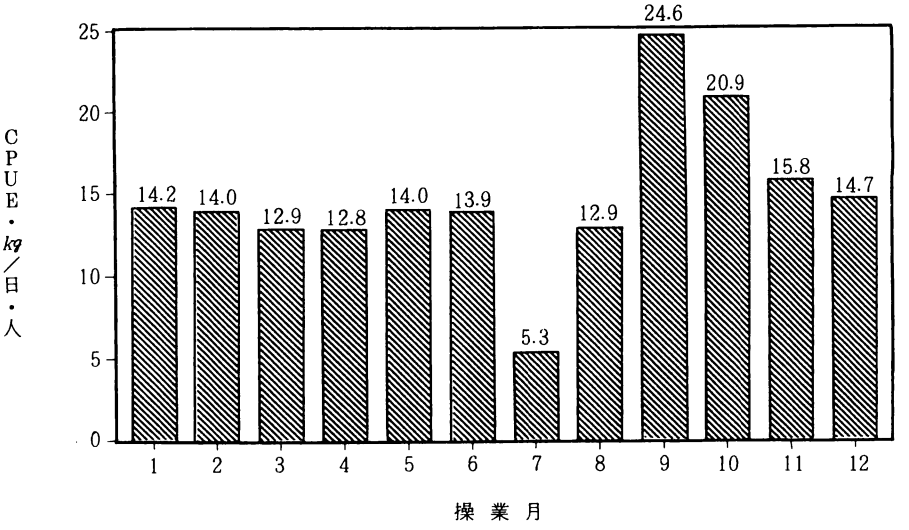


図10－26. 貝類全体ＣＰＵＥの月別比較

ｂ．月別比較（漁獲実態調査から）

月別漁獲量と延べ従事者数から、月別のＣＰＵＥを求め図10－26に示した。

① 9月のＣＰＵＥが24.6kg／日・人で最も高く、最低は8月でわずか5.3kg／日・人であった。

② 9月高いのは、サザエの禁漁期開けに当たるためで、8月低いのはサザエ、クボガイ類が禁漁、自主規制期間に入り、漁獲の対象がトコブシ、アワビになるためである。

③ 20kg以上で最も高い9、10月と最低の7月を除く月は、10kgから15kgの範囲で大差無かった。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

3) ＣＰＵＥ

(1) 貝類全体ＣＰＵＥ：ｃ．漁場別比較

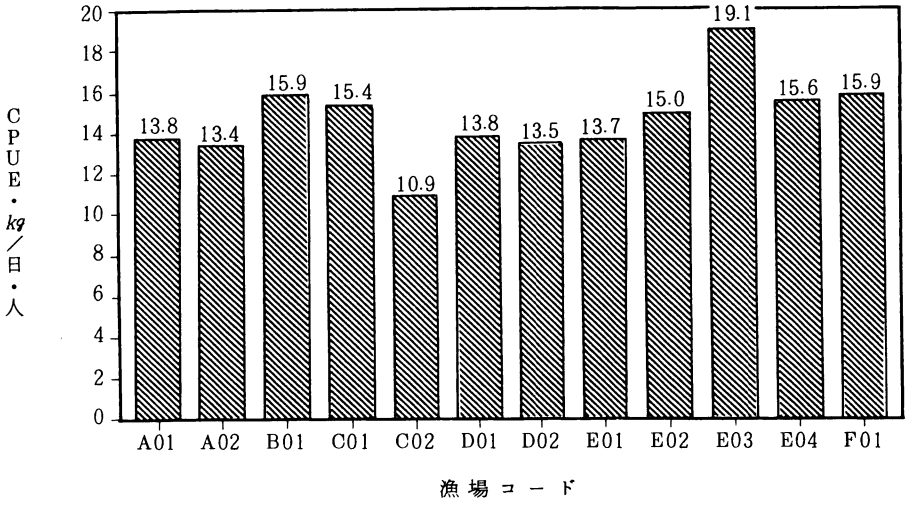


図10－27. 貝類全体ＣＰＵＥの漁場別比較

ｃ．漁場別比較（漁獲実態調査から）

年間の漁場別漁獲量と延べ従事者数から、貝類全体について漁場別のＣＰＵＥを求め図10－27に示した。

① 最高は、Ｅ03漁場で19.1kg／日・人、最低はＣ02漁場の10.9kg／日・人であった。

② 他の漁場は、13kgから15kg台で大きな差はみられなかった。

③ 漁獲量、漁業従事者数ともに最も多かったＥ04漁場は、15.6kgで４番目に高かった。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

3) ＣＰＵＥ

(2) 種類別ＣＰＵＥ：ａ．年別比較

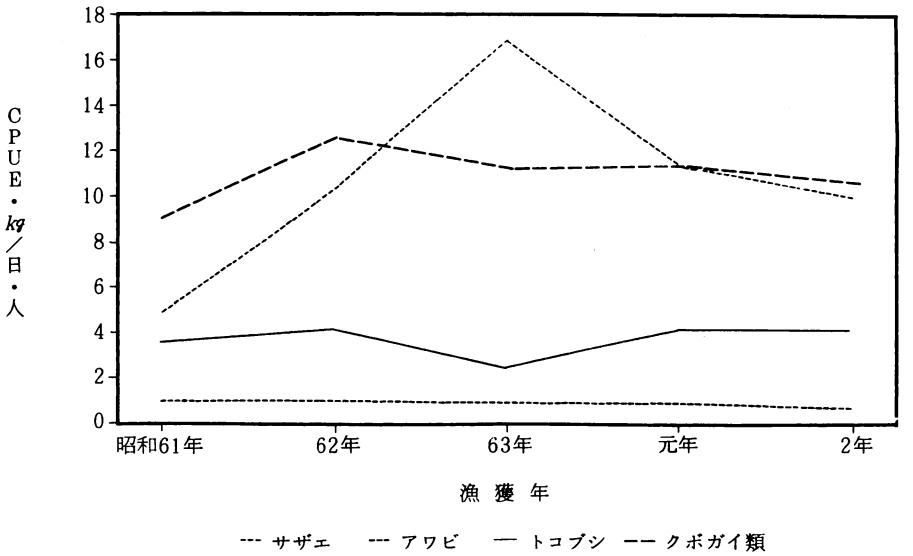


図10－28. 種類別ＣＰＵＥの年別比較

(2) 種類別ＣＰＵＥ（漁獲実態調査から）

ａ．年別推移

種類別の年間漁獲量と延べ従事者数からＣＰＵＥを求め、その年別推移を図10－28に示した。

① サザエは、昭和63年最も高くて16.9kg／日・人で、平成２年にはその約６割の10kg／日・人に減った。

② アワビは、１kg／日・人前後で低く、変動もない。

③ トコブシは４kgｇ／日・人前後で推移していたが、昭和63年には2.４kg／日・人に低下した。その後、４kg／日・人前後に再び回復してきている。

④ クボガイ類は、昭和62年の12.5kg／日・人を最高にその後減少し、平成２年には10.6kg／日・人になった。

⑤ 種類別の５年間の平均を求め以下に示した。

サ ザ エ 11.3（kg／日・人）　　ア ワ ビ 0.9（kg／日・人）

ト コ ブ シ 3.7（kg／日・人）　　クボガイ類 11.0（kg／日・人）

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

3) ＣＰＵＥ

(2) 種類別ＣＰＵＥ：ｂ．月別変化

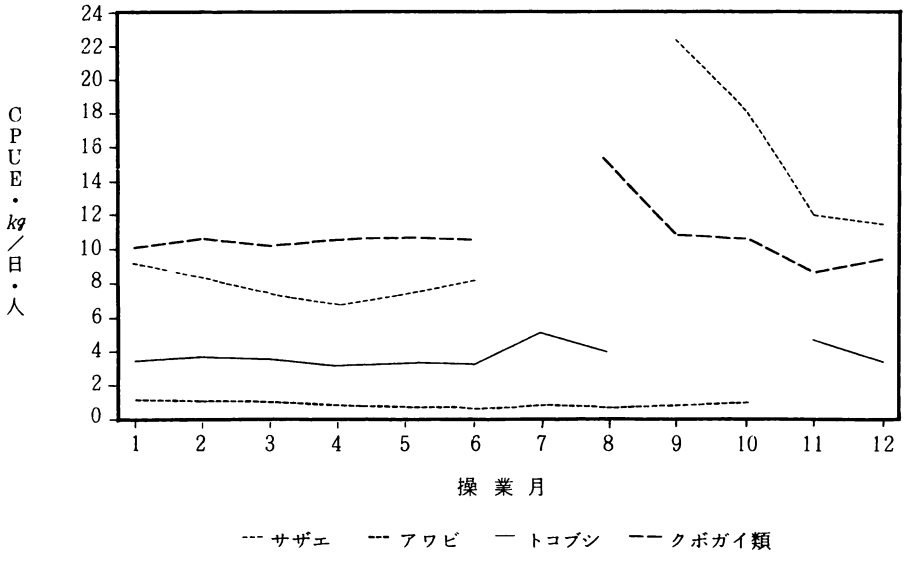


図10－29. 種類別ＣＰＵＥの月別変化

ｂ．月別変化（漁獲実態調査から）

種類別の月間漁獲量と延べ従事者数から月別のＣＰＵＥを求め、その推移を図10－29に示した。

① サザエは、禁漁期開けの９月22.3kg／日・人で最高を示し、以後減少して４月6.8kg／日・人と最低になった。

② アワビは、値そのものが低く、大きな季節変動はみられないが、１月から３月までが１kg台で最も高くなっている。これは、水温の低い時期、岩の表面近くに這い出してくるアワビの生態的特性を反映した結果と考える。

③ トコブシは、７月5.1kg／日・人で最も高く、次いで禁漁期開けの11月の4.6kg／日・人となっている。

トコブシが７月高いのは、他の種類が禁漁期間とか自主規制期間になるため、トコブシへの漁獲強度が強まるためと考える。

④ クボガイ類は、サザエと同じ様な変化を示し、自主規制期間開けの８月15.1kg／日・人で最高を示し、以後10kg前後で推移している。

サザエと似た傾向を示すのは、同じ表在性の生態的分布を示すためである。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

3) ＣＰＵＥ

(2) 種類別ＣＰＵＥ：ｃ．漁場別比較

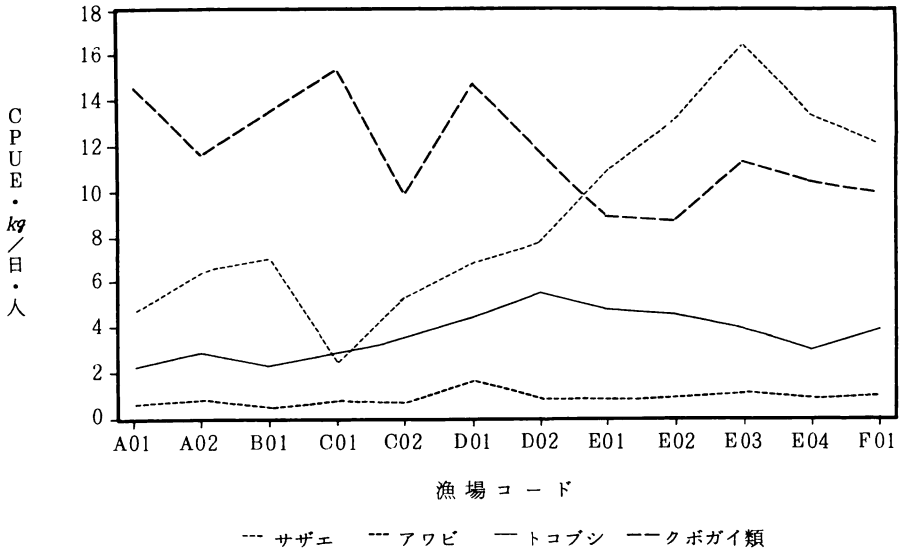


図10－30. 種類別ＣＰＵＥの漁場別比較

ｃ．漁場別比較（漁獲実態調査から）

種類別の漁場別年間漁獲量と延べ従事者数から漁場別のＣＰＵＥを求め、その推移を図10－30に示した。

① サザエは、島の南西部から南東部にかけて高く、最高はＥ03漁場の16.5kg／日・人で、最低はＣ01漁場の2.4kg／日・人であった。なお、漁獲量の最も多かったＥ04漁場は13.4kg／日・人で2番目に高い値になっている。

② アワビは、1.0kg以上がＤ01、Ｅ03及びＦ01の3漁場で、そのうちＤ01漁場が1.6kg／日・人で最高を示した。

③ トコブシは、島の南西部の漁場で高く、最高はＤ02漁場の5.5kg／日・人であった。漁獲量の最も多かったＥ01漁場は4.8kg／日・人であった。

④ クボガイ類は、漁場間によるバラツキが大きく、比較的島の北から北西部で高くなっている。最高は、Ｃ01漁場の15.4kg／日・人であった。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

4) 漁獲物の出荷・販売

(1) 種類別島外出荷割合

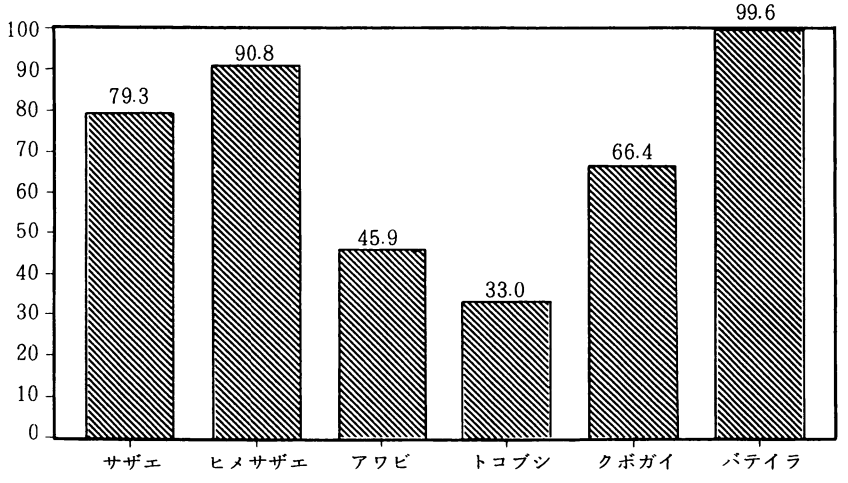


図10－31. 漁獲物の島外出荷割合

4) 漁獲物の出荷・販売（漁獲実態調査から）

昭和63年の差木地漁協での貝類漁獲物の島外出荷の実態を調査した。

(1) 種類別の島外出荷割合

図に示してあるヒメサザエとは、殻高5～6cmの殻長制限（5cm未満）ぎりぎりの小型のサザエである。

① 島外出荷割合が高いのは、バテイラ（シッタカ）で漁獲物の実に99.6%を占めている。次いでヒメサザエの90.8%、サザエの79.3%となっている。

② トコブシ、アワビは少なく50%以下となっている。トコブシは、島の民宿等の宿泊施設と磯釣りの餌としての需要があり、またアワビは漁獲量そのものが少ないためと考えられる。

10. 差木地漁協の採貝漁業の実態

4) 漁獲物の出荷・販売

(2) 島外出荷先

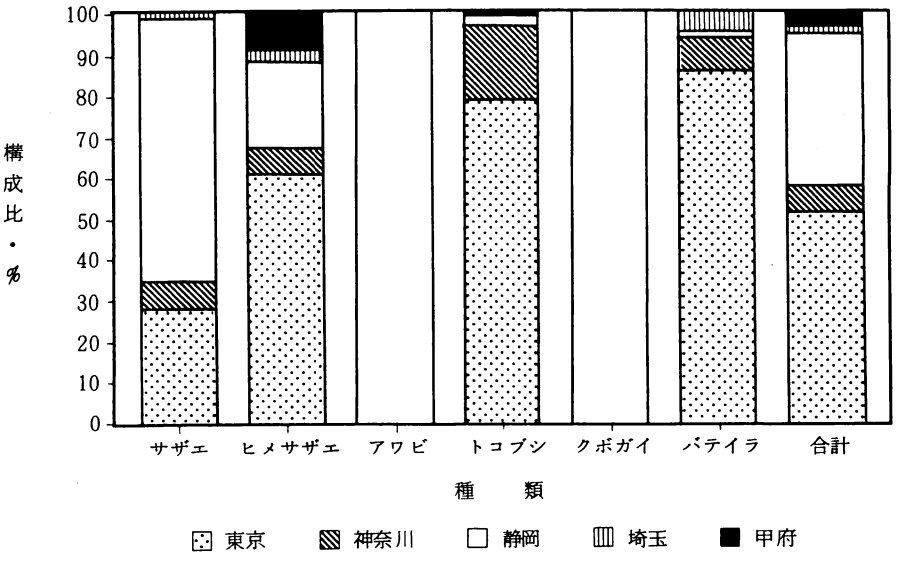


図10－32. 漁獲物の島外出荷割合

(2) 島外出荷先（漁獲実態調査から）

出荷先は、1都4県の6市場の10仲買に及んでいる。図10－32に種類別の出荷先の構成比を示した。

① 貝類全体でみると、東京が最も多く約51％で、次いで静岡の36％となっている。

② 東京市場へは、トコブシ、バテイラ、ヒメサザエの出荷割合が高くなっている。

③ アワビ、クボガイの100％とサザエの約6割は静岡の仲買に出荷されている。

④ クボガイは、東京市場では他の貝類（例：房州産キサゴ）との競合と外観的な特徴から消費者に敬遠されて需要が少なく、民宿での需要の高い伊豆方面にほとんど出荷されている。

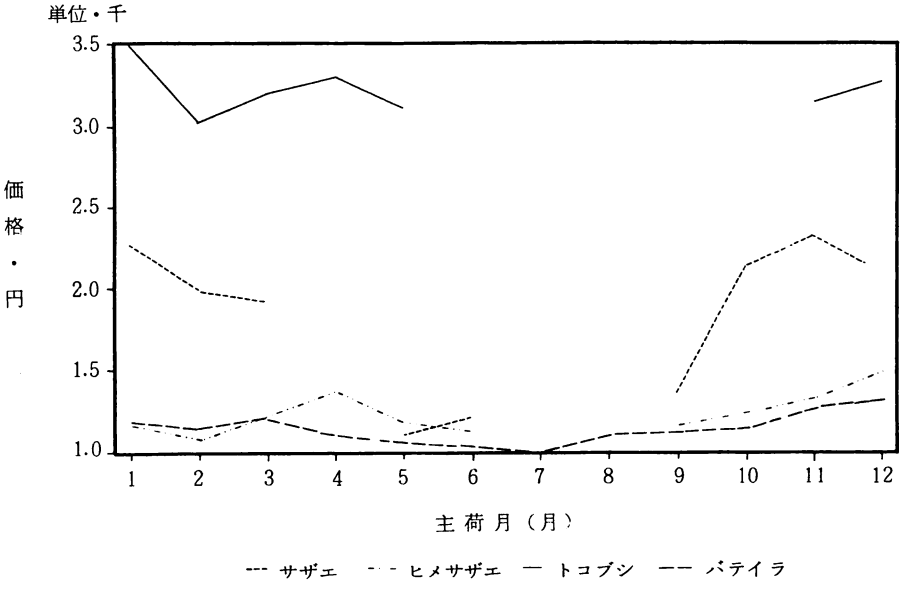


図10－33. 東京市場での種類別価格の月別変化

(2) 島外市場の価格（漁獲実態調査から）

東京市場での昭和63年に於ける4種類の月別平均価格の変動を図10－33に示した。

① 種類別の年間の平均価格は、トコブシ3,211円、サザエ1,822円、ヒメサザエ 1,236円及びバテイラ1,139円であった。

② 年間の価格変動が大きかった種類はサザエで、最高は11月の 2,320円、最低は5月の1,109円であった。

③ トコブシは大きな変動はなく、最高が1月の3,483円、最低は2月の3,021円であった。

④ 全体的に冬季の価格が高くなっている。

11. 大島の禁漁区漁場の利用状況

11. 大島の禁漁区漁場の利用状況

1) 年間の口開け日数

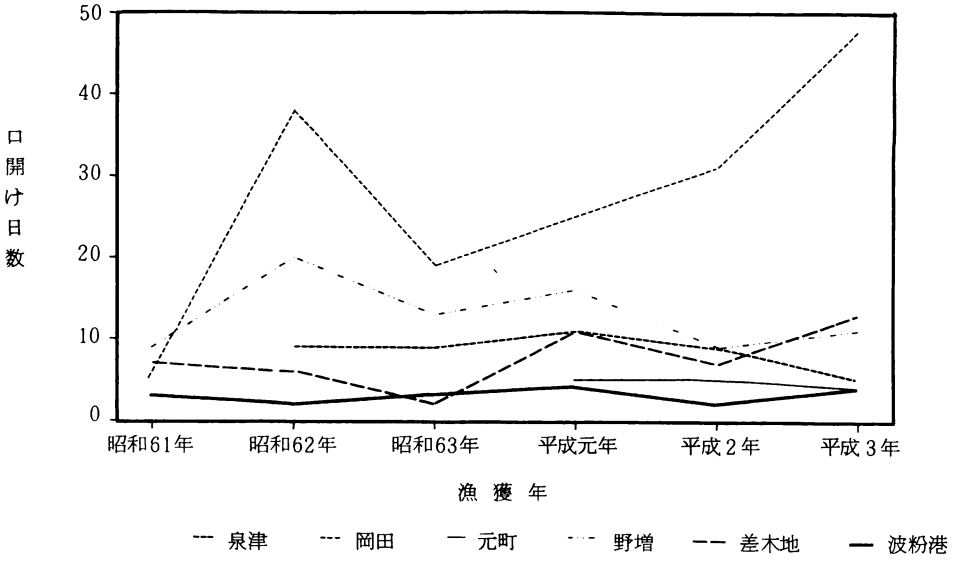


図11－1．大島の各漁協に於ける禁漁区の口開け日数

大島の第1種共同漁業権漁業は、共有漁場になっている。しかし、昭和50年に大島分場でのアワビ種苗生産放流事業の開始にともない、各漁協地先に放流漁場として海岸線1kmの範囲で種苗放流用の栽培漁場が設定された。現在では、貝類の放流漁場としてだけでなく、貝類、イセエビの禁漁区としても有効活用されている。

以下、昭和61年以降の各漁協での禁漁区の口開け状況について、漁協水揚げ伝票をもとに調べたのでその結果を示す。

1) 年間の口開け日数

① 口開け日数は漁協によってまちまちであり、最近、年間10日間の範囲を越えて口開けされている漁協もある。

② 岡田、野増漁協を除く他の漁協では、ほぼ年間10日間の範囲で口開けが行われているが、岡田漁協では、30日以上に及んでいる。

③ 平成3年の漁協別の口開け日数は以下のとおりであった。

泉　津	5日	岡　田	48日	元　町	4日
野　増	11日	差木地	13日	波浮港	4日

11. 大島の禁漁区漁場の利用状況

2) 禁漁区利用者数

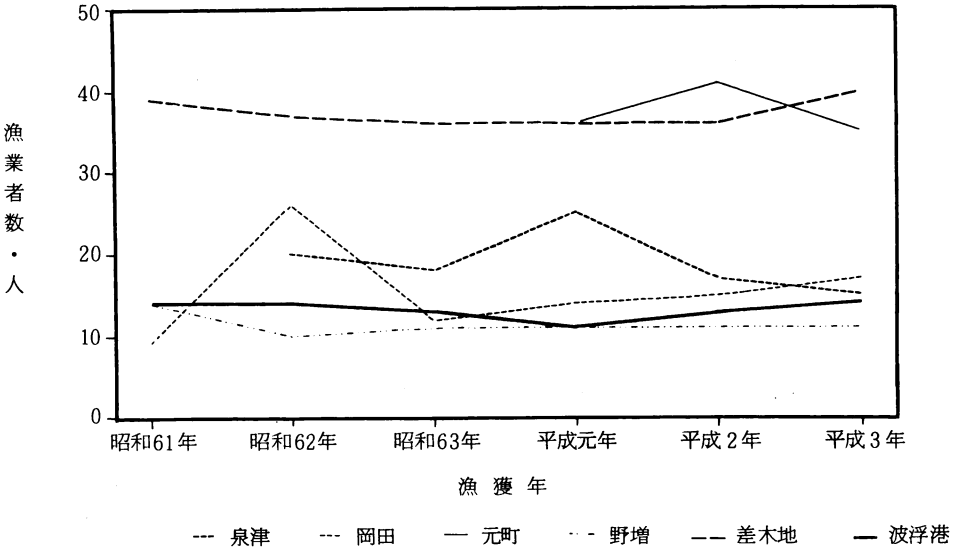


図11－2．大島の各漁協に於ける禁漁区利用者数

2) 禁漁区利用者

① 大島全体の年間利用者数は最近増加し100人を越えている。

② 組合別にみると、差木地、元町漁協が30人以上で最も多く、他の漁協は10～20人の範囲で大差はない。

③ 平成3年度の組合別利用者数は以下のとおりで、大島全体では131人であった。なお、岡田、泉津漁協は平成3年合併して伊豆大島漁協になったが、禁漁区の口開けについては旧地先別に実施されていることから旧漁協別に示した。

泉　津	15人	岡　田	17人	元　町	35人
野　増	11人	差木地	40人	波浮港	14人

11. 大島の禁漁区漁場の利用状況

3) 禁漁区利用者の漁業形態

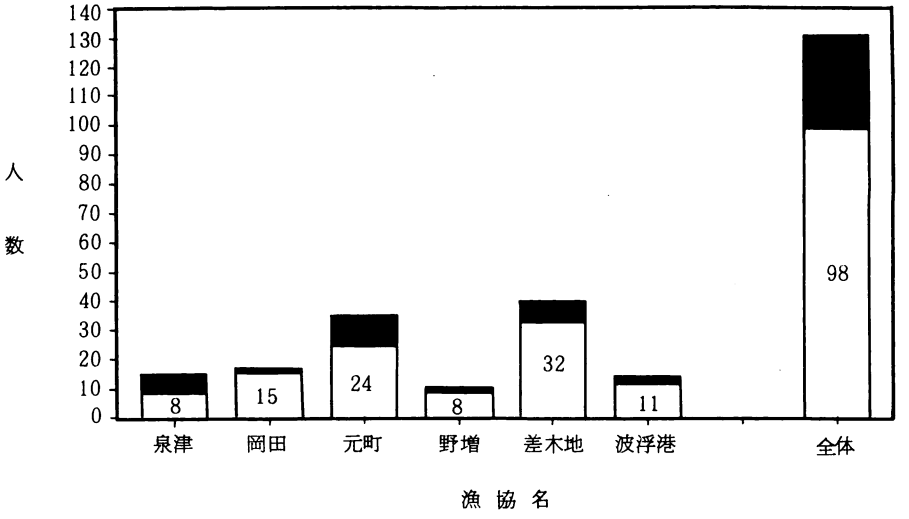


図11－3．大島の各漁協に於ける禁漁区利用者の漁業形態

3) 禁漁区利用者の漁業形態

平成3年各漁協の禁漁区の口開け時に操業した者について、漁業を専業または主たる兼業にしているか、あるいは他の職業を専業または主な兼業にしているかについて聞き取り調査を実施し、その結果を図11－3に示した。

① 平成3年大島にある6カ所の禁漁区漁場を利用した者131人中漁業を専業または主たる兼業にしている者は、全体の約75％に当たる98人であった。

② 組合別では、岡田、野増、差木地漁協で漁業を専業、または主たる兼業にしている者が80％以上を占めたのに対し、泉津では利用者15人中わずか半分の8人であった。また、元町漁協でも利用者35人中11人が漁業以外の職業を専業または主たる兼業にしている者であった。

11. 大島の禁漁区漁場の利用状況

4) 禁漁区での漁獲量：(1) 漁獲量の推移

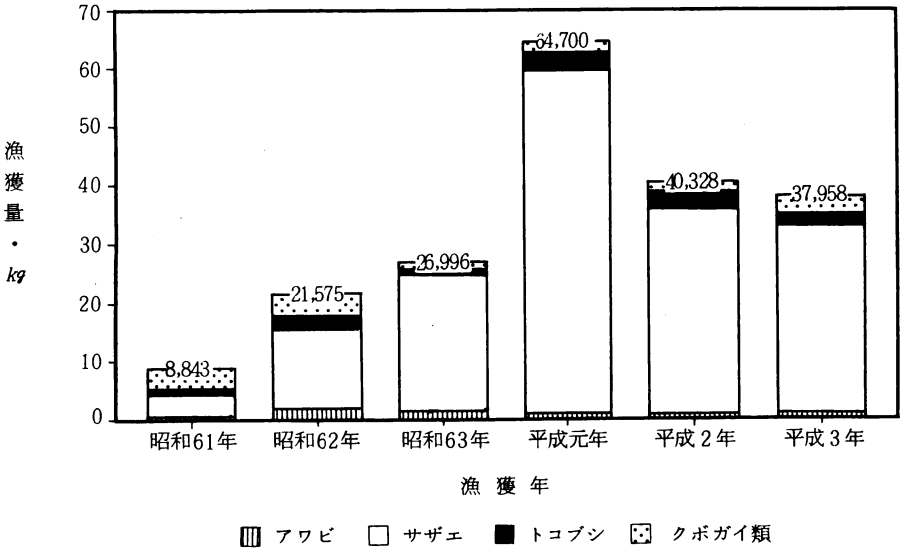


図11－4．大島の各漁協禁漁区での漁獲量

4) 禁漁区での漁獲量

(1) 漁獲量の推移

昭和61年から平成3年にかけての大島全体の禁漁区での種類別漁獲量の推移を図11－4に示した。

① 貝類全体としては、平成元年64.7tで最大の漁獲量であったが、最近減少傾向を示し平成3年にはその約6割の38.0tになった。

② 禁漁区漁獲量の約8割はサザエが占めており、最高の漁獲量を示した平成元年の全漁獲量に占める割合は91％に及んだ。

③ アワビ、トコブシの割合はいずれも10％以下であり、最大漁獲量は、トコブシが平成元年の3.4t、アワビが昭和62年の1.9tであった。

④ 平成3年に於ける禁漁区での各種類別漁獲量及び構成比は以下のとおりであった。

アワビ	0.7t（2％）	サザエ	32.3t（85％）
トコブシ	2.0t（5％）	クボガイ類	3.0t（8％）

11. 大島の禁漁区漁場の利用状況

4) 禁漁区での漁獲量：(2) 種類別漁獲量割合

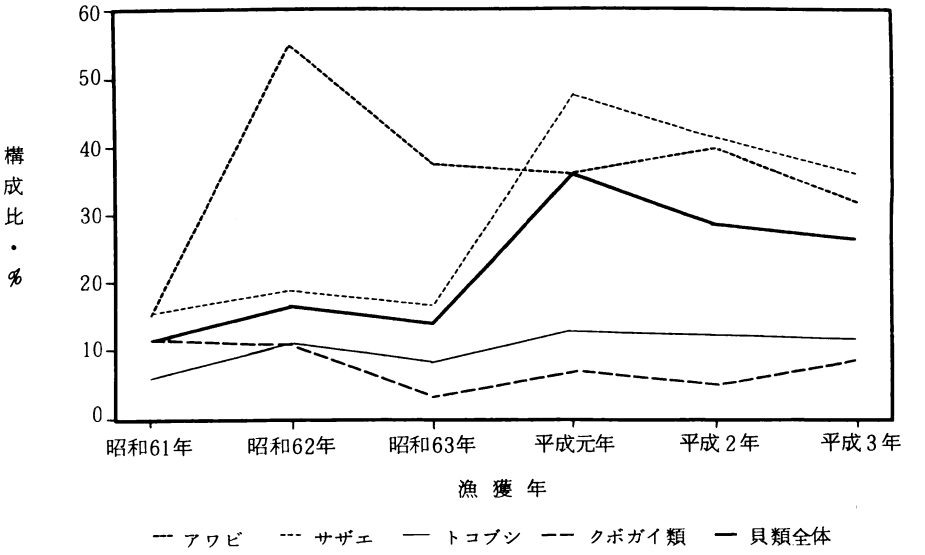


図11－5．大島の各漁協禁漁区での種類別漁獲量割合

(2) 種類別漁獲量割合

昭和61年から平成3年までについて、大島全体の全漁場の漁獲量に対する禁漁区で漁獲された漁獲量の割合を種類別に求め、図11－5に示した。なお、全漁場の漁獲量については、「東京都の水産」の漁獲量資料を使用した。

① 貝類全体としては、平成に入ってから20%以上を占め高くなってきており、平成元年には36%と最高を示した。

② 種類別では、アワビ、サザエの割合が他の種類に比べ高くなっている。特に、サザエは平成に入ってから3倍近くに増加し、平成元年には48%に達した。しかし、平成3年には36%と40%台を割り、若干減少してきている。

③ トコブシ、クボガイ類は、5～10%付近で推移し、大きな変動はない。

11. 大島の禁漁区漁場の利用状況

4) 禁漁区での漁獲量：(3) 漁協別漁獲量割合

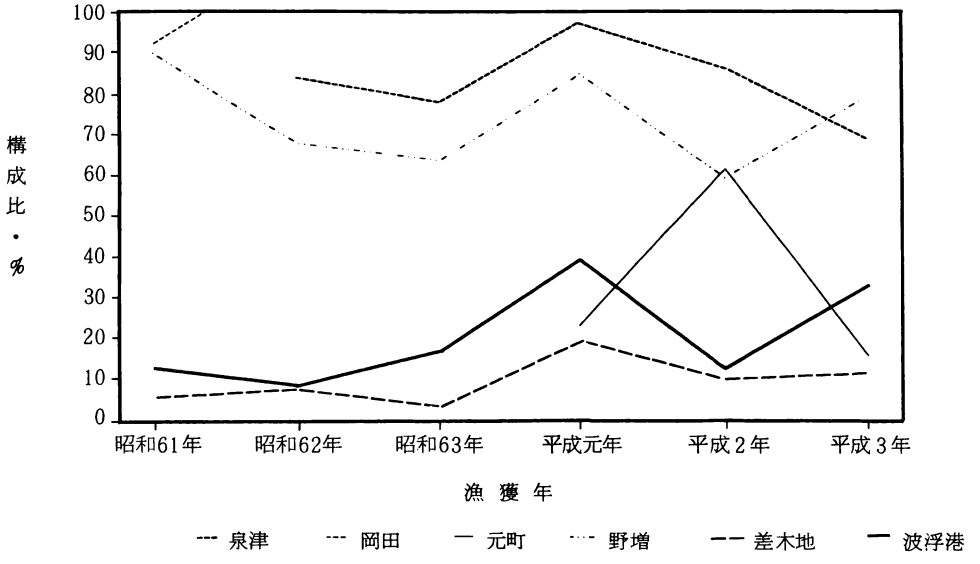


図11－6．禁漁区漁場での貝類漁獲量の全体に占める割合

(3) 漁協別漁獲量割合

禁漁区漁場での貝類漁獲量の全体に占める割合を各漁協別に求め図11－6に示した。

① 岡田漁協はほぼ100%、泉津、野増漁協が80%前後で高い割合を占めている。

② 差木地、波浮港漁協では、最近若干増加してきているが、ほぼ30%以下で他の漁協に比較し低くなっている。

③ 差木地、波浮港漁協で平成に入ってから禁漁区の割合が増加したのは、サザエ資源の異常発生により、それまで余り利用していなかった禁漁区を共同操業の形で口開けするようになったからである。

④ 平成3年に於ける各漁協の禁漁区の漁獲量割合は以下のとおりであった。

泉　津	69%	岡　田	100%	元　町	15%
野　増	79%	差木地	11%	波浮港	33%

Ⅲ. ま と め

1．東京都の漁獲量について

過去20年間の漁獲量の推移を見ると、昭和47年以降昭和54年まで毎年着実に増加し、その間約４倍になったが、以後１万ｔ前後で増減を繰り返し、停滞している。

昭和56年以降の漁獲量の動態を海区別にみると、小笠原海区が10年間で約1.５倍に増加した以外は、大島・本島と離島海区が停滞、八丈、三宅海区が減少傾向で、特に三宅海区では５年間の移動平均でみても昭和56年時に比較し約７割に減少してきている。

海区別の漁獲量構成は、大島・本島海区が最も多くて全体の約４割強を占めているが、その約６割以上を占めるサバの漁獲の低迷で、最近伸び悩んでいる。

最近５年間の魚類、水産動物、貝類及び藻類に分けた種類別の漁獲量構成は、魚類漁獲量が7,650ｔで全体の約75％を占めて最も多く、次いで藻類の2,043ｔ、20％、水産動物279ｔ、3％、貝類205ｔ、２％となっている。

種類別漁獲量構成の特徴としては、昭和61年以降の藻類の漁獲量の増大である。これは、最近の自然食品嗜好の影響で海藻の需要が増加し、価格の高騰も相まってトサカノリの漁獲量が増加したためである。しかし、昭和63年の2,268ｔをピークに平成に入ってからは、2,000ｔを割り、減少してきている。

貝類漁獲量は約200ｔで東京都全体での構成比は、わずか2％弱に過ぎない。海区別にみると、昭和50年代前半までは八丈海区の割合が最も高かったが、昭和53年以降大島・本島海区が多くなり、最近では150ｔ以上を漁獲し全体の7割以上を占めている。昭和50年代前半以前の大島・本島海区の漁獲量が少なかったのは、漁協を通さずに販売する庭先販売の占める割合が高かったため、漁獲統計に数字として現れなかったためである。

海区別の貝類漁獲量の推移を10年前と比較すると、大島・本島海区と八丈海区が1.５倍以上になっているのに対し、離島、三宅海区では５～６割に減少してきている。大島・本島海区の漁獲量の増加要因はサザエで、八丈海区はトコブシとギンタカハマの漁獲量の増加による。

2．東京都の漁獲金額

漁獲金額も漁獲量同様に最近低迷している。つまり、昭和47年の 1,213百万円から昭和57年の 6,268百万円まで毎年直線的に増加していたが、昭和58年以降50億から60億円の範囲で停滞している。しかし平成2年には昭和57年以来はじめて60億円を越え、6,108百万円の漁獲高であった。これは、三宅・八丈海区でのカツオ類の漁獲増によるもので、前年の 283百万円から約３倍の810百万円を漁獲した。

海区別の構成比は、大島・離島海区が最も多く全体の約35％を占めている。最近10年間の増減は、小笠原海区が約２倍に増加している以外、他の海区での大きな変動はない。

種類別では、魚類が全体の約７割近くを占め最も多く、10年前の昭和55年頃は75％以上を占めていたが最近では60％台に減ってきている。全体としては、魚類に代わり藻類、貝類の割合が増加してきている。

貝類の漁獲金額は最近５年間平均で341百万円で、全体の6％を占めるに過ぎない。しかし、この20年間増減を繰り返しながらも着実に増加し、平成元年には 438百万円を漁獲し過去最高であった。種類別にみると、トコブシは昭和56年以降２億円前後で停滞しているが、サザエは昭和61年以降急激に増加し平成元年に18千万円の漁獲高であった。

海区別では、大島・本島海区が 213百万円で最も多く、東京都全体の62％を占め、同海区に於ける貝類漁獲金額の全漁獲金額に占める割合も20％を越え、この10年間若干の増減はあるが増加傾向を示している。

３．大島に於ける採貝漁業経営体

関東農政局の海面漁業生産統計資料に記載されている最近５年間の採貝漁業従事経営体数は、ほぼ140経営体から150経営体の間である。漁協別では、差木地漁協が48経営体で大島全体の３割以上を占め最も多くなっている。

漁業者１人当たりの年間出漁日数は大島全体としては昭和61年以降の５年間平均で55日であるが組合間の差が大きく、採貝漁業の盛んな差木地漁協の 131日に対し、他の漁協は50日以下になっている。

昭和63年採貝漁業に従事した者を対象にしたアンケート調査結果による採貝漁業従事者の年齢構成は、平均年齢45才で最高令71才、最年少21才で、20才台の若年層は8.７％と少なく、50才以上の高齢者層が、37.3％と全体の約４割を占め、高齢化が進んでいる。しかし、年齢構成の山は全体の33％を占める40才台で、昭和63年実施した第８次漁業センサス結果でみる東京都全体の年齢構成の山の50才台より若いところにある。一方、漁協別にみると、差木地漁協では調査した44人中20才台が７人で16.3％を占め、若年層の割合が高くなっているのに対し、岡田漁協では採貝漁業従事者が12人中８人が50才以上の高齢者となっており、組合間で差がみられた。

４．大島に於ける漁獲量

大島に於ける漁獲量も東京都全体と同様に昭和54年まで毎年増加し、以後昭和63年まで５千ｔ前後で停滞していたが、平成元年には昭和52年以来はじめて３千ｔを割った。これは、サバの漁獲量が前年の2,865ｔから半分以下の1,186ｔに減少したためである。魚類以外の漁獲量の変動を５年間の移動平均から求めた漁獲量指数で10年前と比較すると、貝類は2.５倍、藻類は1.８倍に増加している。

漁協別にみると大島の漁獲量の約9割を波浮港漁協が占め、その約7割はサバの漁獲量である。しかし、波浮港漁協の漁獲量もサバの不漁により昭和61年の 5,324ｔをピークに減少傾向で、平成に入ってからは3千ｔを割っている。他の漁協は、最近5年間ではほぼ停滞している。

貝類の漁獲量は、昭和63年過去20年間で最高の漁獲量を上げ、その後平成に入ってからは若干下降傾向であるが、依然として高いレベルで推移している。昭和60年代の漁獲量の増加はサザエの漁獲量の増加によるもので、最近5年間の種類別漁獲量は、サザエ92ｔ、クボガイ類34ｔ、トコブシ25ｔ及びアワビ3ｔで、サザエが貝類漁獲量の約6割を占めて最も多い。一方、組合別の漁獲量は差木地が98ｔで全体の6割以上を占めて最も多く、以下波浮港23ｔ、元町11ｔ、野増9ｔ、岡田8ｔ及び泉津4ｔとなっている。中でも、岡田漁協は昭和60年以降毎年増加傾向を示し、平成2年には昭和60年の漁獲量3ｔの5倍以上に当たる16ｔを漁獲し波浮港の20ｔに次いで多くなっている。なお、岡田漁協での貝類の漁獲はほとんど禁漁区漁場で行われたものである。

5．大島の漁獲金額

過去20年間の推移を見ると、昭和47年以降昭和57年まで毎年直線的な増加を示していたが、その後10億円前後で増減、停滞している。最高は、昭和57年の1,288百万円であった。

組合別では波浮港漁協が最も多く大島全体の約5割を占めているが、昭和57年の 851百万円を最高に最近では5億円前後で停滞している。他の漁協についてこの10年間の推移を見ると、泉津漁協を除く他の4漁協は増加し、特に岡田、元町及び野増漁協では2倍になっている。

種類別では魚類が5割以上で最も多く、その約4割はサバが占めている。魚類金額も昭和57年の 952百万円を最高に、昭和60年代以降6億円前後で停滞している。他の種類は、10年前に比較し全て増加しており、水産動物、藻類は約2倍になっている。

貝類の漁獲金額は昭和50年以降若干の増減はあったが毎年増加し、平成元年には過去20年間で最高の 252百万円を漁獲した。種類別では、昭和61年までトコブシの漁獲金額が最も多かったが、昭和62年以降サザエに代わっている。サザエは平成元年 166百万円を漁獲し過去最高を記録した。

6．差木地漁協の採貝漁業の実態

昭和61年から平成2年まで差木地漁協での採貝漁業の実態を調査し、5年間で延べ31,708人の漁業者について日別の種類別漁獲量を調べた。そのうち、全体の72％に当たる22,844人については操業場所を調査することができた。ここで得られた5年間の資料を元に、差木地漁協での採貝漁業の実態を解析した。

1) 採貝漁業従事者

年間の漁獲量、従事日数を問わず採貝漁業に従事した者は、46人から49人の範囲で大きな変動はない。このうち、昭和61年から継続して毎年採貝漁業に従事している漁業者は、41人で、年間従事日数が毎年90日以上のものは25人であった。なお、平成2年の採貝漁業従事者は48人で、全体の平均年間従事日数は130日、年間90日以上従事者は33人で、最高は288日であった。

年間の採貝漁業日数は、三原山の噴火のあった昭和61年を除き、130日台で大きな変動はない。このうち平成2年の従事日数の頻度分布を見ると、従事者数48人中90日以上は33人で全体の約7割を占め、210日以上が10名で、最高は281日であった。

年間の延べ従事者数は5年間平均6,342人で、月別にみると平均528人で最高は11月の671人、最低は7月の 378人となっている。従事者数の変動は、禁漁期間、自主規制期間の影響を受けており、サザエの禁漁期間となる7、8月は極端に少なくなっている。11月は、サザエが既に解禁になっているのに加え、トコブシも解禁になり、さらに冬季にかけての価格の向上と、比較的海が凪の日が多いこともあって従事者数が多くなっている。

種類別の月平均延べ従事者数は、サザエ435人、トコブシ403人、クボガイ類 222人及びアワビ138人となっている。

漁場別ではE04漁場（通称奥山磯）が 1,437人で全体の約23%を占めて最も多く利用されている。差木地漁協の旧地先漁場の利用者数は3,348 人で全体の約53%になっている。

2) 採貝漁業の漁獲量

大島・本島海域でみられたサザエの大量発生の影響を受け、昭和63年 134tで過去最高の漁獲量を上げた。以後、サザエの漁獲量の減少にともない貝類全体の漁獲量も減り、平成2年には再び 100tを割り88tになった。5年間の平均漁獲量は98tで、大島全体の約64%を占めている。種類別では、サザエ56t、クボガイ類25t、トコブシ15t及びアワビ1tとなっている。

月別の貝類漁獲量をみると、サザエが解禁になる9月から年末にかけて月平均10t以上を漁獲して多く、最高はサザエの解禁月に当たる9月の12tとなっている。最低は、サザエが禁漁、クボガイ類が自主規制期間に当たる7月で、僅か2t弱しか漁獲していない。

月別の種類別漁獲量は、何れの種類も禁漁期、自主規制期間開けの月が最も多く、禁漁の効果が明瞭である。中でも、サザエは9月の一月間で年間の約2割弱を漁獲し、9月から12月までの4ヵ月間の漁獲量は年間の6割に達している。他の種類では、アワビが1月から3月にかけて冬季に多く漁獲され、この3ヵ月間で年間漁獲量の6割弱を漁獲している。これは、日頃は岩穴等の奥に生息しているアワビが水温の下がるこの時期に岩の表面にでてくる

ためと考えられる。

漁場別漁獲量は、年間延べ漁業従事者の最も多いＥ04漁場が年間漁獲量23ｔで全体の23％を占め最も多くなっている。なお、旧差木地漁協地先での漁獲量は約58ｔで全体の60％を占めている。種類別にみるとサザエ、アワビはＥ04漁場、トコブシはＥ01とＥ04漁場、クボガイ類はＡ02とＥ04漁場での漁獲量割合がそれぞれ高くなっている。

種類別の漁協別漁獲量には漁場特性がみられ、サザエはＥ04漁場を中心に島の南部から南東部にかけた漁場で全体の約７割を漁獲し、アワビも同漁場での漁獲量割合が約６割に及んでいる。また、トコブシは北西部から南東部にかけた広い範囲で漁獲され、クボガイ類は従事者数の多いＥ04漁場と島の北部から北西部での漁獲量が多くなっている。

3)　個人別漁獲量

採貝漁業に従事する者の中には、専業あるいは採貝漁業を主たる兼業にしている漁業者とともに、他の職業を主たる職業にし、日曜日とか禁漁区の口開け時にだけ操業する、いわゆるサラリーマン漁師といわれるおかず採りの者も含まれている。

そこで、調査を始めた昭和61年から平成２年までの５年間継続して採貝漁業に従事し、年間採貝漁業従事日数の平均が90日以上の者を抽出し、漁獲の実態を調べた。

既に述べたとおり、上記条件を満たす者は31人であった。漁業形態は、全体の61％に当たる19人が採貝漁業の専業者であった。これらの平成２年に於ける平均年齢は48才、最高齢62才、最年少29才で50才以上の高齢者が16人で全体の52％を占めている。また、年間の採貝漁業日数は５年間平均で179日、最高は286日、最低は97日であった。31人の年間の平均漁獲量は約82,343kgで、差木地漁協に於ける貝類漁獲量の93％を占め、１人当たりの平均漁獲量は2,656kgとなり、31人中30人が年間1,000kg以上を漁獲し、最高は5,618kgであった。

漁業者別の漁獲物組成を見ると、サザエ1,464kg（55％）、アワビ37kg（１％）、トコブシ439kg（17％）及びクボガイ類716kg（27％）であるが、漁業者間で依存している種類に差がみられた。つまり、サザエを主な漁獲対象にしている漁業者と、クボガイ類に依存している漁業者に分かれ、サザエの漁獲量割合が50％以上占めている者が21人、クボガイ類は６人であった。特に漁獲量の多い者ほど単一種への依存度が高くなっている。また、クボガイ類に依存している漁業者の場合、単価が安いため量で補っており、漁獲量の最も多い者をはじめ上位５人中３人は、クボガイ類漁獲量構成が80％以上を占めるクボガイ類依存者であった。

年間従事日数と漁獲量の関係をみると、年間従事日数 180日前後までは従事日数に対応して漁獲量も増加してくるが、それ以上では横ばいになる傾向がみられている。これは、依存している種類に関係なくみられた。また、年齢との関係をみると、漁獲量の間にはまったく相関はみられなかった。

単位努力量当たりの漁獲量（以下ＣＰＵＥ）は、昭和63年が20.8kg／日・人と最大で、平成２年には13.2kg／日・人に落ちてきている。これはサザエの漁獲量の減少による。

月別の変化をみると、サザエの解禁月である９月が最も高く24.6kg／日・人、最低は７月の5.3kg／日・人で、他の月はほぼ10～15kg／日・人の範囲で大差ない。

漁場別では、ほとんどの漁場がほぼ15kg／日・人前後で大きな差はみられないが、Ｅ03漁場が19.1kg／日・人で他の漁場よりも高く、Ｃ02漁場が10.9kg／日・人と低くなっている。

種類別の５年間の推移をみると、サザエが昭和61年の4.9kg／日・人から昭和63年16.9／日・人と急激に増加した以外は、５年間の平均がアワビ0.9kg／日・人、トコブシ3.7kg／日・人、クボガイ類11.0kg／日・人付近で大きな変動はみられない。しかし、月別の変動を見ると差がみられ、何れの種類も禁漁期間開けが高くなる傾向がみられ、そのうちトコブシでは漁獲対象種がトコブシとアワビだけになり漁獲強度が強くなる７月が最大になっている。また、漁場別の比較を行うと、漁場間の差がみられ、サザエは島の南西部から南東部の漁場、アワビ、トコブシは南西部漁場、クボガイ類は北から北西部の漁場でそれぞれ高くなっている。

4)　出荷・販売

貝類漁獲物の島外出荷割合は種類により差があり、サザエ、バテイラはほぼ80％以上を島外出荷しているのに対し、アワビ、トコブシでは50％以下になっている。アワビは漁獲量そのものが少なく、まとまるまで蓄養しなければならず、またトコブシの場合は、島の民宿、釣り宿での需要があるため島外出荷が少なくなっている。

出荷先は関東近県の１都４県６市場の10仲買に出荷しているが、東京市場が最も多く全体の約半分を占めている。また、種類により出荷先が異なり、トコブシ、バテイラ、ヒメサザエは東京市場が多くなっているが、アワビ、クボガイ類のほぼ100％、サザエの約6割は静岡の仲買に出荷されている。

出荷価格は何れの種類も冬季高くなる傾向がみられ、価格変動が大きいのはサザエで約２倍の差がみられた。

７．大島に於ける禁漁区漁場の利用実態

採貝漁業は第１種共同漁業権漁業の対象になっており、現在大島に於いてはその漁業権は全島共有になっている。しかし、各漁協の地先には昭和50年以降水産試験場大島分場でアワビの種苗生産・放流事業が開始されるにともない栽培漁場としての禁漁区が海岸線１kmの範囲で設定された。そして、栽培漁場の漁業権行使については、年間10日間の範囲で各漁協で管理することになった。

現在は、アワビ・トコブシの放流漁場としてだけでなく、各漁協に唯一残された貝類、イセエビ及びテングサ等の単協独自の専用漁場として管理運営されている。そして、島内にある6つの漁協（平成3年からは一部合併して5漁協）のうち、差木地、波浮港漁協を除く他の漁協の貝類の漁獲は、ほとんどその各漁協地先に設けられた禁漁区漁場のみで行われているのが現状である。

禁漁区での漁業行使については、従来のオリンピック方式から共同操業形式を取り入れているところが増えている。野増、差木地及び波浮港漁協では共同操業による均等割りとし、また岡田漁協では、1人当たりの漁獲量の上限を決めて口開けしている。このような共同操業形式をとるようになったのは、近年のサザエ資源の増加により、操業に余裕がでてきた結果であろう。この形態は、今後の栽培漁業のあるべき姿を示唆しているものと考える。

昭和61年以降の禁漁区漁場の漁場行使状況を見ると、岡田漁協では昭和62年以降毎年10日以上口開けされ、平成3年には48日間に及んだ。その他の漁協ではほぼ10日間前後で漁場行使されている。

漁場の利用者は、海面漁業生産統計に記載されている人数とほぼ同じ 130人前後である。そのうち、漁業を専業または主たる兼業にしている者は平成3年の従事者では全体の75％に当たる98人であった。組合別にみると、泉津、元町漁協での漁業以外の職業を専業または主たる兼業にしている者の割合が高くなっている。

禁漁区での漁獲量は、昭和63年まで貝類全漁獲量の約15％前後で推移してきたが、平成元年には急激に増加し30％を越え、その後も20％以上を占めている。漁協別にみると、岡田、泉津及び野増漁協で全漁獲量の約80％以上を禁漁区漁場に依存している。最近差木地、波浮港漁協では、禁漁区漁場でのサザエ漁獲量の増加によりその割合は若干増加しているが10から30％の範囲で、他の漁協に比べ低くなっている。種類別にみると、アワビ、サザエが約3割、トコブシ、クボガイ類が約1割を占めている。そのうち、アワビの漁獲量の約9割以上は泉津、岡田、野増漁協での漁獲であり、元町、差木地及び波浮港漁協ではここ数年禁漁区でのアワビの漁獲はほとんどなされていない。元町はもともとアワビの漁場が禁漁区になく、差木地、波浮港漁協の場合、最近のサザエの大量発生の影響によりサザエを主体に口開けしてきた結果と考える。トコブシは、岡田、元町漁協の禁漁区で多く漁獲されているが、野増、差木地及び波浮港漁協では平成3年の差木地漁協の296kg以外、昭和63年以降100kg以下の漁獲しか上げていない。

以上、述べてきた通り栽培漁場の利用状況の特徴としては、採貝漁業従事者も少数で、貝類漁獲量も少ない泉津、岡田及び野増漁協では栽培漁場への依存度が高く、専業者の多い差木地、波浮港及び元町漁協では、当然共有区利用の割合が高くなっている。漁獲量については、アワビとサザエの栽培漁場での漁獲量が大島全体の3割以上を占めて高くなっている。アワビは、乱獲により共有漁場での資源量が少なくなってきたためで、サザエは、近年の大量発生で資源

量が逆に急激に増加し、栽培漁場の活用が活発になったためである。また、禁漁区漁場の特性として、漁獲物の種類構成に漁協間で差がみられている。つまり、泉津、岡田漁協では他の漁協に比べ漁獲対象になる4種類を片寄りなくとっているが、元町ではトコブシ、差木地及び波浮港漁協ではサザエのそれぞれ1種類に片寄った漁獲が行われている。これは、資源の状況とともに設定された漁場の特性による影響が大きく働いていると考える。

栽培漁場もただ獲るだけの利用では将来の展望は見いだせない。耕し、育てていく必要がある。一般漁場と違い年間の限られた期間しか利用されないため、漁場が老化しやすい。特に、最近ではサザエ漁獲を目的にした利用が多く、漁場の転石を起こすことが少なくなっている。その結果、石はお互いに固着したり、砂中に埋没するものが増え、トコブシの生息場が少なくなってきている。今後、種苗放流による積極的な資源の添加、漁業調整規則、漁業行使規則の遵守といった漁業管理の徹底とともに漁場の管理も十分に心がける必要がある。

Ⅳ. 参考資料

1．東京都の水産（昭和47年～平成3年）：　東京都農林水産部水産課
2．第8次漁業センサス（昭和63年）：　農林水産省統計情報部

Publication of The Metropolitan
Fisheries Experiment Station No. 369

Memoir of The Tokyo Metropolitan
Fisheries Experiment Station No. 206

平成5年3月発行

印刷物規格表第2類
刊行物番号（4）3

伊豆大島における採貝漁業について

編　集　東京都水産試験場技術管理部
電話（03）3600－2873

発　行　東京都水産試験場
〒125 東京都葛飾区水元公園1番1号
電話（03）3600－2871

印　刷　原口印刷株式会社
〒101 東京都千代田区猿楽町1－5－19
電話（03）3291－8819